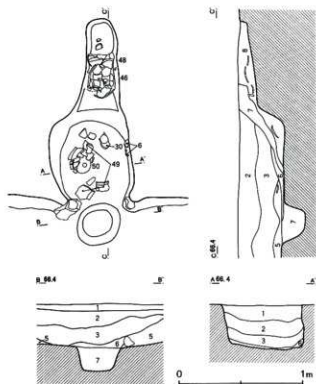
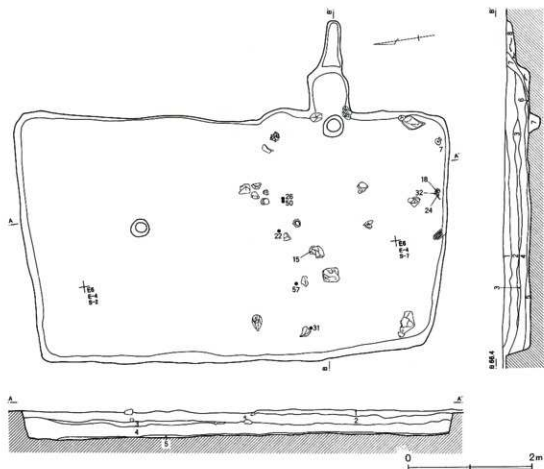


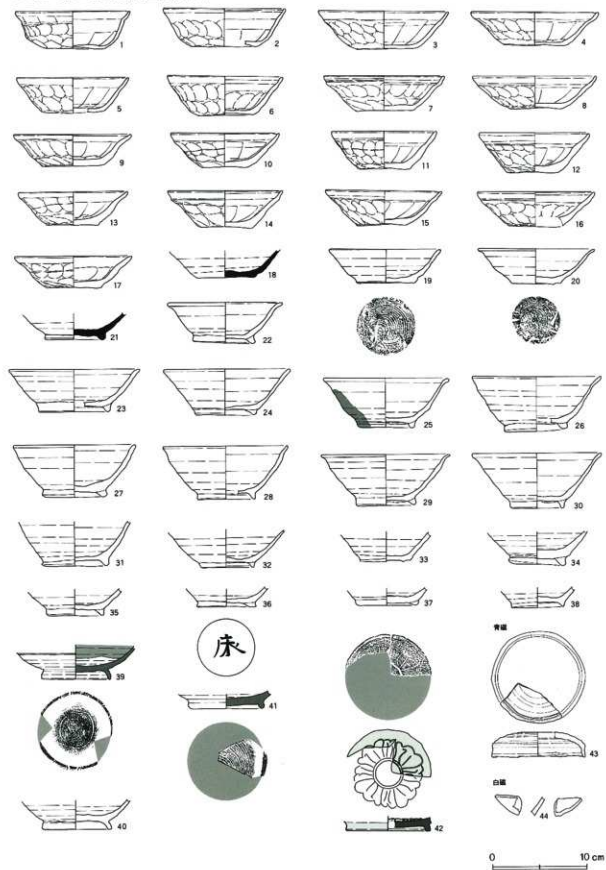
第79図 第31号住居跡



第31号住居跡

- 1 こげ茶色土 日曜石混じり粘土、炭化物を多量に含み、日曜石を少量含む 粘りあり
- 2 こげ茶色土 黄土粒子、炭化物を多量に含み、日曜石を少量含む
- 3 灰黄褐色土 粘りあり (取り戻)
- 4 褐色土 粘土、炭化物を少量含む 炭化物を多量に含む
- 5 暗褐色土 暗褐色土を少量含む 炭化物混
- 6 赤褐色土 黄土ブロッカと粘りあり (天井板敷層上)
- 7 茶色土 炭化物混
- 8 黄褐色土 粘土、炭化物を多量に含む

第80図 第31号住居跡出土遺物(1)



3は坏AM、他は坏BVである。18から20は、碗である。2・5は底部、18は口縁部が欠損している。

18は須恵器(S)、他は須恵器(NS)である。21から38・40は、高台付碗である。24・27から29・31・32・36・38は、須恵器(NS)であり、他は、須恵器(HS)である。36は、底部外面に墨書「床」がみられる。39は、灰釉陶器の高台付碗である。41は、灰釉陶器の長頸壺の底部である。42は、緑釉陶器の陰刻花文高台付碗の底部である。43は、中国産の青磁で、六角台子の蓋である。44は、中国産の白磁で、高台付碗の破片である。21・31・32・34から40は口縁部、23・28は底部が欠損している。25は、外面体部から高台に

かけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

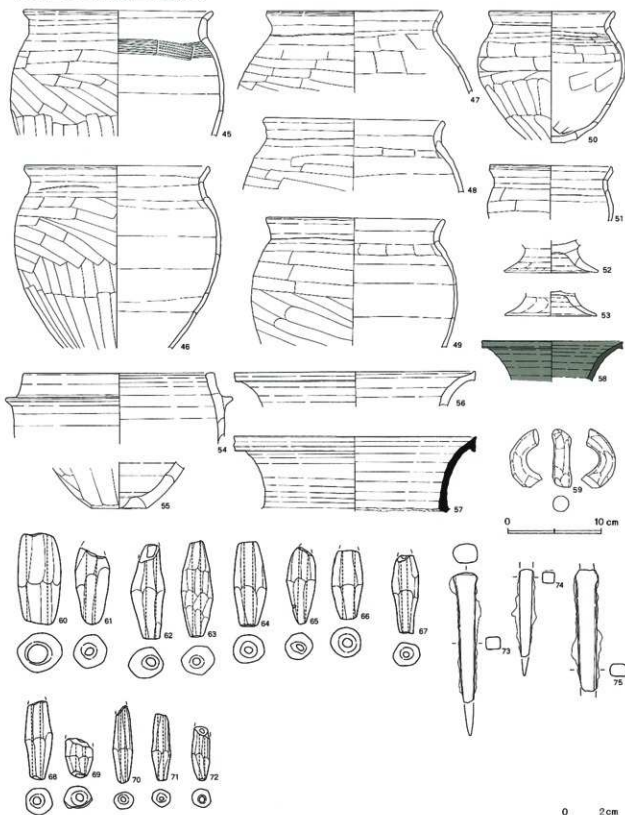
45から49は、土師器の甕である。50から53は、土師器の台付甕である。54・55は、土師器の羽釜である。56・57は、須恵器の大甕の口縁部である。56は須恵器(NS)、57は須恵器(S)である。58は、灰釉陶器の長頸壺である。59は、須恵器(NS)の把手である。46は底部、45・49・は胴部下位以下、47・48・51は胴部中位以下、54は胴部上位以下、58は頸部が欠損している。52・53・55は、底部のみである。

60から72・74は、土鏝である。73から75は、鉄製品である。73は釘の破片、75は棒状鉄製品である。

第53表 第31号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	種類	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏A	V	H	12.0	4.0	6.0	E, F	良好		黄 橙	50	
2	坏A	M	H	12.8	4.1	6.7	B, E, H	不良		黄 橙	40	
3	坏A	M	H	13.7	4.0	6.1	F, H	良好		赤 褐	20	
4	坏B	V	H	13.4	3.6	6.5	F, H	普通		赤 橙	50	
5	坏B	V	H	11.7	3.8	6.3	B, F, H	普通		やや暗い 赤 褐	20	
6	坏B	V	H	12.1	4.2	5.7	A, B, E, F	普通		赤 褐	70	カマド
7	坏B	V	H	12.7	3.7	6.0	B, E	良好		赤 褐	90	
8	坏B	V	H	12.9	3.5	5.4	B, E, I	普通		淡 黄 橙	30	
9	坏B	V	H	12.3	3.4	6.2	B, D, E	普通		淡 黄 橙	90	
10	坏B	V	H	11.4	3.7	4.4	B, E, F	不良		暗 黄 褐	30	
11	坏B	V	H	11.0	4.0	5.6	B, E, H	良好		淡 黄 橙	50	
12	坏B	V	H	11.5	4.2	5.3	B, E, H	不良		黄 橙	20	
13	坏B	V	H	11.4	3.6	5.5	B, E, H	普通		淡 黄 橙	60	
14	坏B	V	H	12.1	4.0	5.3	B, D, E, H	普通		暗 黄 橙	90	
15	坏B	V	H	12.2	3.8	5.4	C, F, H	不良		暗 黄 橙	40	
16	坏B	V	H	12.2			B, E, H	不良		暗 黄 橙	30	
17	坏B	V	H	12.4	3.4	5.7	B, E, H	普通		黄 橙	80	
18	碗	S				6.0	B, E	良好	R	灰	100	底部のみ
19	碗	NS	11.7	3.6	6.0	B, H	良好	R	灰	白	30	
20	碗	NS	12.0	3.7	5.0	B, D, H	良好	R	灰	褐	100	
21	高台付碗	S			5.9	B	良好	R	灰	白	100	底部のみ
22	高台付碗	HS	12.0	4.3	6.4	B, E, I	普通	R	浅 黄 橙	75		
23	高台付碗	HS	13.6	4.6	7.3	C, E, H	普通	R	浅 黄 橙	40		
24	高台付碗	NS	13.2	4.8	6.0	E	普通	R	黄 灰	60		
25	高台付碗	HS	13.0	5.2	5.2	B, E, I	良好	R	にぶい	橙 30		
26	高台付碗	HS	13.5	5.9	5.7	B, E, I	普通	L	にぶい	橙 40		
27	高台付碗	NS	12.8	5.5	6.1	B, E, H	良好	L	灰	白	25	
28	高台付碗	NS	13.1	5.6	5.9	B, E, F	良好	L	灰	白	20	
29	高台付碗	NS	13.4	5.5	5.9	B, I	普通	R	灰	黄	50	
30	高台付碗	HS	13.4	5.8	5.0	B, E, I	普通	R	灰	黄	40	カマド
31	高台付碗	NS			6.1	B, E, I	普通	L	灰	白	40	
32	高台付碗	NS			5.5	B, E, H, K	良好	R	灰	褐	100	

第81图 第31号住居跡出土遺物(2)



第54表 第31号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	継輪	色調	残存	出土位置その他
33	高台付碗	HS					B, E, I	普通	L	にぶい橙	20	カマド
34	高台付碗	HS				49	B, E, I	良好	R	にぶい橙	20	
35	高台付碗	HS				53	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	20	
36	高台付碗	NS				61	B, D, H	良好	R	灰白	100	底部。墨書「床」
37	高台付碗	HS				58	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	20	
38	高台付碗	NS				51	B, E, I	良好	R	灰好白	20	
39	高台付碗	K				71	D	良好		濃灰	50	
40	高台付碗	HS				69	I	良好	R	灰好白	40	
41	高台付碗	K				74	D	良好		淡灰	10	
42	高台付碗	M				87		良好		淡黄緑	20	動物花文
43	六角合子蓋	青磁	98				D	良好		濃緑	30	
44	高台付碗	白磁						良好		白	5	
45	甕BⅢb	H	19.8				B, E, I	良好		明赤褐	25	
46	甕BⅢa	H	19.8				B, C, E, G	良好		明赤褐	80	
47	甕AⅠc	H	18.4				B, E	良好		暗赤褐	50	
48	甕AⅠC	H	18.9				B, E, I	良好		暗褐	40	カマド
49	甕AⅢC	H	18.7					良好		暗褐	50	カマド
50	台付甕	H	13.2				A, B, E, I	良好		明赤褐	80	カマド
51	台付甕	H	12.6				B, E, G, I	良好		暗褐	40	カマド
52	台付甕	H					B, C, E, I	良好		明赤褐	40	
53	台付甕	H					C, E, I	良好		明赤褐	40	
54	羽釜AⅡa	HS	20.2		29		B, D, E, H	良好		淡橙	20	
55	羽釜部	HS					A, B, E, H	良好		淡橙	25	
56	甕	NS	25.6				A, B	良好		白	20	
57	甕	S					B, G	良好		灰	10	
58	長頸壺	K	14.8				D	良好		濃緑灰	10	
59	把手	NS					B, D	良好		淡灰	5	

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第31号堅穴式住居跡を中彌Ⅵ期に位置付けたい。

第32号住居跡(第82図・第83図)

D-6・7、E-7グリッドで確認した。周辺は、遺構が密集していたが、覆土の上面に多量の焼土がみられたため、比較的容易に確認できた。

第55表 第31号住居跡出土土鐘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
60	橙	100	5.0	2.4	1.1	25.4	AⅠ	I a	4	
61	にぶい黄橙	70		1.9	0.6	11.8	CⅠ	I a	113	
62	褐	90		1.8	0.6	11.6	CⅠ	I b	114	
63	にぶい橙	100	5.3	1.8	0.4	13.6	CⅠ	I a	115	
64	褐	100	4.7	1.7	0.5	12.3	CⅠ	I a	116	
65	にぶい橙	80		1.5	0.5	8.0	CⅠ	Ⅱ b	117	
66	にぶい黄橙	70		1.6	0.5	8.7	CⅠ	I a	118	
67	浅黄	70		1.4	0.3	7.1	CⅠ	Ⅱ a	119	
68	浅黄	80		1.4	0.4	8.1	CⅠ	I b	120	
69	褐	20		1.5	0.4	3.2	CⅠ	Ⅳ a	121	
70	褐	90		1.0	0.3	3.3	CⅡ	I b	383	
71	浅黄	80	3.7	1.0	0.2	2.7	CⅡ	I b	384	
72	にぶい橙			1.0	0.3	2.4	CⅡ	Ⅲ b	385	

住居跡の北東部は調査区外のため、全容は不明であった。住居跡の形状は、長方形であったと考えられる。規模は、長辺4.1m・短辺2.98m・深さ0.80mであった。

主軸方位は、N-84°-Eであった。

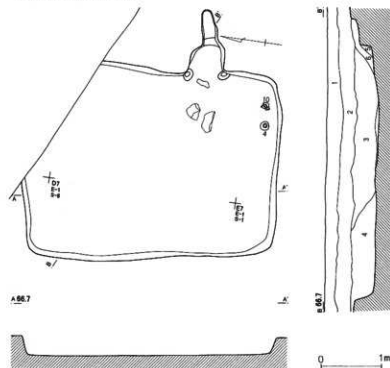
カマドは、東壁やや南寄りに検出した。焚き口部の両端に、補強材の石の抜き取り痕跡を検出した。燃焼部

には、掘り込みがみられなかった。燃焼部から煙道部にかけては、緩やかに傾斜し、段をもって細長い煙道部に移行していた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

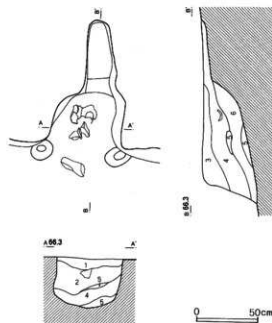
遺物は、住居跡の南東隅から須恵器の高台付碗(4・10)が出土した。

第82図 第32号住居跡



A967

A967



第32号住居跡

- 1 緑粘土
- 2 暗褐色土：磁土、炭化物を多量に含む、目録石を少量含む粘粒あり
- 3 暗褐色土：磁土、炭化物を多量に含む
- 4 灰黄褐色土：磁土粒子を少量含む粘粒あり
- 5 赤褐色土：磁土ブロック主体
- 6 高褐色土：炭化物多量に含む

A963

0 50cm

1・2は、土師器の坏AMである。3は、須恵器(HS)の碗である。4から11は、高台付碗である。6・9・10・11は須恵器(NS)、ほかは須恵器(HS)である。6は底部と高台、8は口縁部と底部、9は口縁部、11は口縁部と高台が欠損している。

12は、黒色土器の高台付碗である。13から15は、灰釉陶器である。13は高台付碗、14は皿、15は段皿である。12は口縁部、13・14は口縁部と底部、15は底部が欠損している。

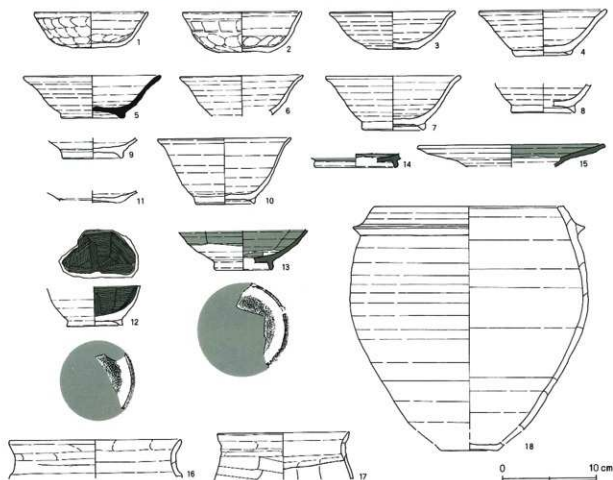
16・17は、土師器の甕である。18は、須恵器(NS)羽釜である。16は、口縁部のみである。17は、胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物から第32号竪穴式住居跡を中壙Ⅱ期に位置付けた。

第33号住居跡(第84図・第85図・第86図)

E-7グリッドで確認した。当初、第35号住居跡のカマドと考え調査を行った。しかし第35号住居跡の東壁に切られた住居跡であることが判明し、1軒の住居跡として調査した。遺構の重複が激しく、カマド燃焼部の一部と煙道部のみを検出した。残存部の深さは0.30m

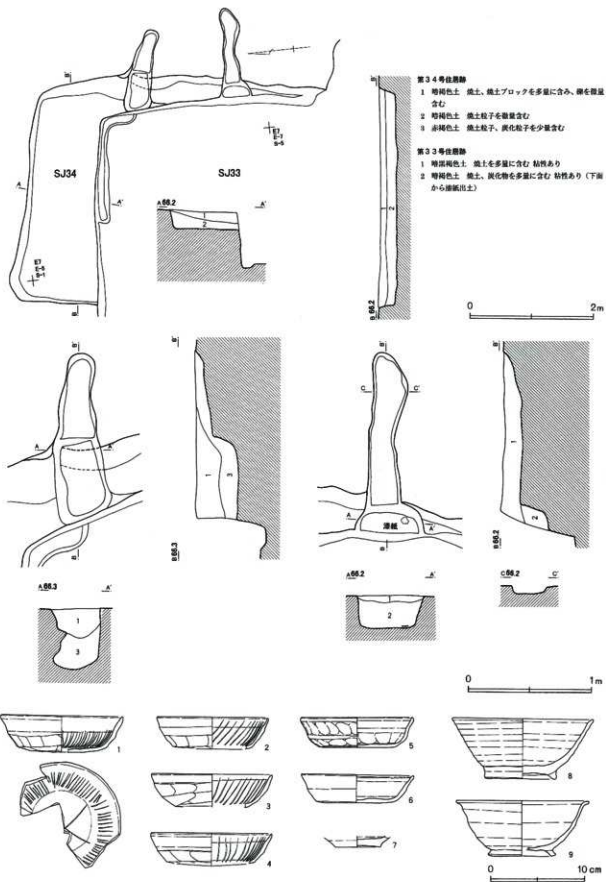
第83図 第32号住居跡出土遺物



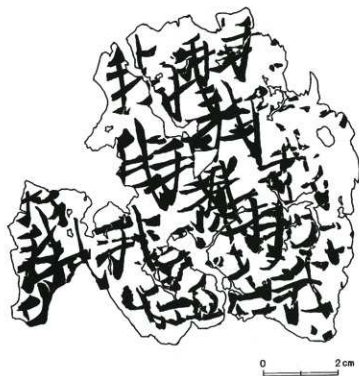
第56表 第32号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A VI	H	11.9	3.7	4.8	B, D, E	普通		暗褐	60	貯蔵穴
2	坏	A VI	H	12.4	4.1	5.5	B, H			淡黄褐	60	
3	碗	HS	HS	13.1	3.8	5.2	B, C, E, K	良好		淡橙	80	
4	高台付碗	HS	HS	13.1	4.7	5.8	B, E, G, H	良好		外一灰褐。 内一灰白。	25	
5	高台付碗	HS	HS	14.2	4.3	6.3	B, E, H	良好		灰白	20	カマド
6	高台付碗	NS	NS	12.9		6.1	B, E, I	普通		灰	40	
7	高台付碗	HS	HS	14.0	5.5	6.1	B, D, E	良好		明褐	25	貯穴
8	高台付碗	HS	HS	14.0	5.5	6.5	B, E, H	良好		淡赤	60	
9	高台付碗	NS	NS			6.0	B, E, I	普通		灰	10	カマド
10	高台付碗	NS	NS	14.0	6.7	6.1	B, E, I	普通		灰	30	
11	高台付碗	NS	NS				E, I	普通		灰	10	カマド
12	高台付碗	黑色				5.9	F, H	良好		黒	30	
13	高台付碗	K				5.8	B	良好		淡灰	10	カマド
14	高台付皿	K				8.3	B	良好		暗灰	10	
15	段	皿	K	19.3			B, D	良好		淡灰	10	カマド
16	甕	A	H	18.0			B, E, H	良好		淡橙	20	
17	甕	A	H	13.8			C, E, H, I	良好		明赤	15	カマド
18	羽	B I	HS	20.3	2.2		B, C, D, G			明赤	70	

第84図 第33・34号住居跡・出土遺物(1)



第85図 第33号住居跡出土遺物(2)



であった。

主軸方位は、 $N-89^{\circ}-E$ であった。

カマドは、東壁で検出され、燃焼部から段をもって細長い煙道部に移行していた。

カマドの燃焼部の底面に接して、漆紙文書が出土した。積文等については、別に詳述する。

遺構の重複関係は、第34・35号住居跡より古かった。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第33号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第34号住居跡(第84図・第85図)

$E-7$ グリッドで確認した。遺構の重複が激しく、確認に手間取った。

第35号住居跡に大半を切られ、全容は明確にできなかったが、住居跡の形状は長方形であろう。規模は、短辺 $3.52m$ ・深さ $0.18m$ であった。

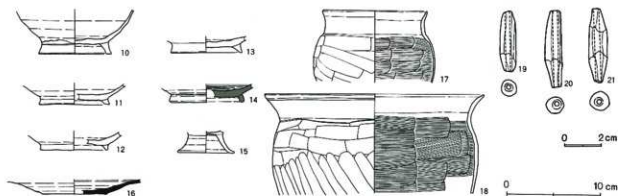
主軸方位は、 $N-108^{\circ}-E$ であった。

カマドは、東壁で検出した。袖部は、検出できなかった。不整楕円形に燃焼部は、浅く掘り込まれ、燃焼部から煙道部へ大きく段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第35号住居跡より古く、第33号住居跡より新しかった。

1は、土師器の坏AM、2は、坏ANである。3は、須恵器(NS)の坏である。4から9は、高台付碗である。9は須恵器(NS)、他は須恵器(HS)である。10は、須恵器(S)の皿である。11は、灰釉陶器の高台付碗である。3・9は、底部のみである。5・10は底部、6は口縁部、7・8・11は口縁部と底部が欠損している。

第86図 第33・34号住居跡出土遺物(2)



12は、土師器の台付き甕である。13から15は、土錘である。12は、台部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第34号竪穴式住居跡を中瀬Ⅲ期に位置付けたい。

第35号住居跡(第87図・第88図・第89図・第90図・第91図)

E-7グリッドで確認した。周辺には、住居跡や土城が密集し、確認に手間取った。しかし、覆土上面の火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は方形で、規模は長辺5.90m・短辺

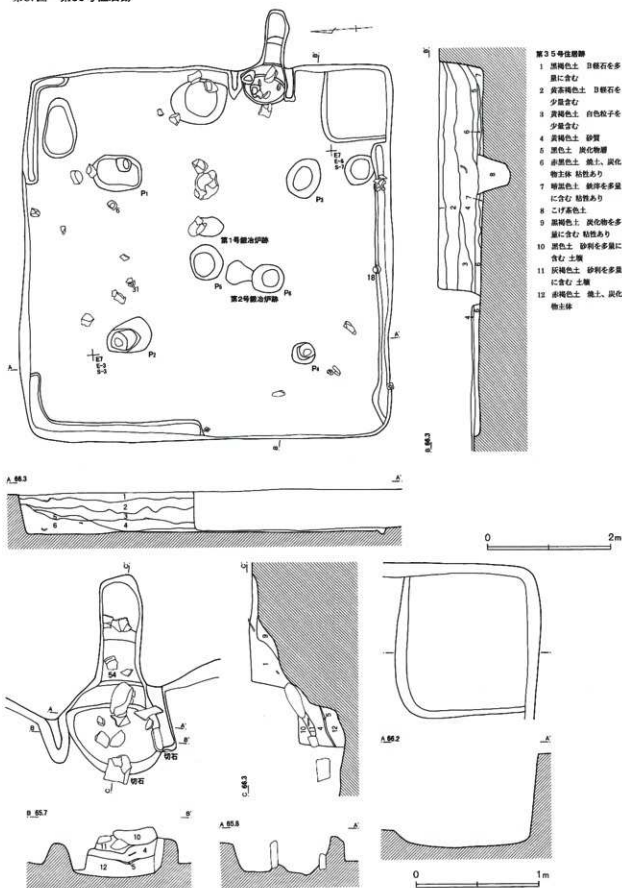
第57表 第34号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	踵	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏(暗文)	H	128	3.9		9.4	B, E	良好		淡黄褐	50	カマド
2	坏(暗文)	H					B, E, H	良好		黄褐	10	
3	坏(暗文)	H					B, E, H	普通		黄褐	20	
4	坏(暗文)	H					B, H	良好		暗橙	20	
5	坏 A II	H	11.7	3.2		8.0	B, D, E	普通		黄橙	100	
6	坏 A II	H	11.9	3.0		8.3	B, E, H	普通		黄橙	100	
7	碗	NS				4.8	B, E, I	普通		灰白	10	
8	高台付碗	HS	14.7	6.9		7.3	B, E	良好		明褐	80	
9	高台付碗	HS	13.9	5.8		6.3	B, E, I	普通		淡黄	70	
10	高台付碗	HS				7.5	B, E, I	普通		浅黄	60	
11	高台付碗	HS				7.2	B, E, I	良好		にぶい黄橙	10	
12	高台付碗	HS				7.2	B, E, I	普通		にぶい黄橙	10	
13	高台付碗	NS				7.3	B, E, I	普通		灰白	10	
14	高台付碗	K				7.5	D	良好		灰	20	
15	台付甕脚	H				5.7	B, E, I	普通		橙	10	
16	須恵皿	S				6.8	B, I	良好		灰	10	
17	台付甕	H	11.0				B, C, E, H	普通		暗茶褐	30	
18	甕 A IV a	H	23.2				B, E, H	良好		やや暗い橙	20	口縁部のみ

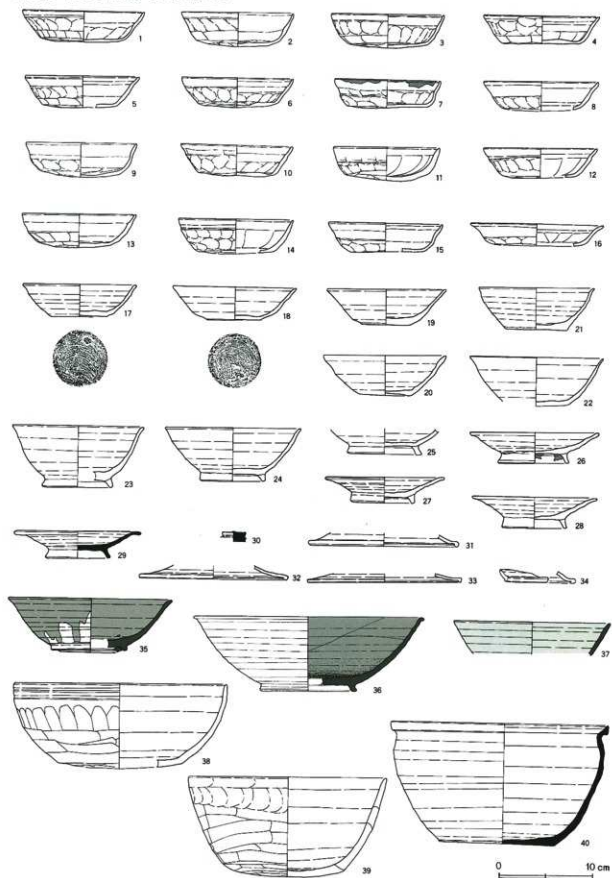
第58表 第34号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
13	橙	100	4.1	1.0	0.3	2.8	C 2	I a	122	
14	橙	100	3.9	1.0	0.2	2.8	C 2	I a	391	
15	黄橙	100	3.2	0.8	0.2	2.1	C 2	I a	386	

第87图 第35号住居跡



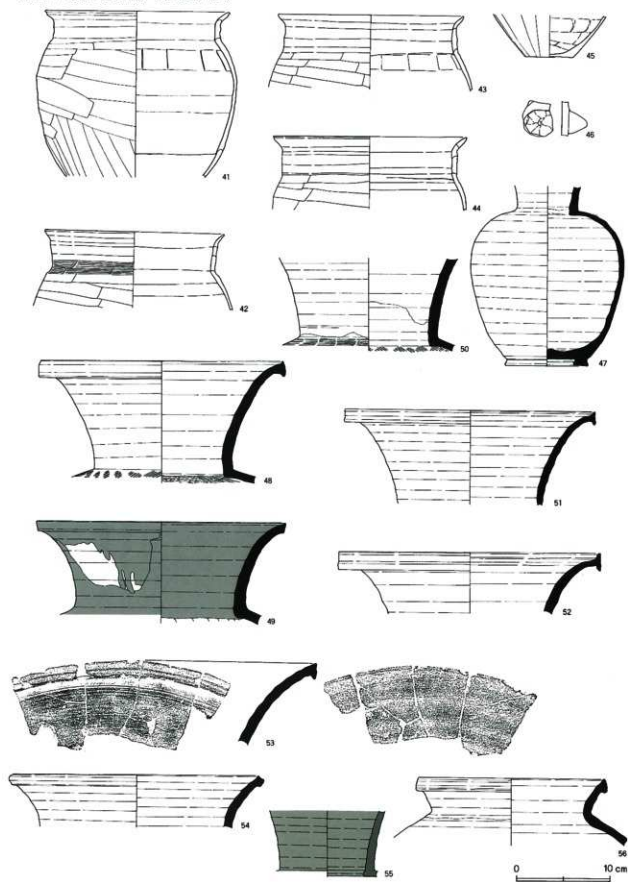
第88图 第35号住居跡・出土遺物(1)



第59表 第35号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	径	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他			
1	坏	A II	H	129	3.3		7.0 B, D, E, H	良	好	青	橙	40			
2	坏	A II	H	118	3.6		6.3 B, E, H	不	良	黄	白	80			
3	坏	A II	H	119	3.5		8.3 B, E, H	不	良	淡	黄	橙	70		
4	坏	A III	H	122	3.0		8.3 B, E, H	不	良	淡	黄	橙	60		
5	坏	A II	H	119	3.3		7.9 B, E	良	好	黄	黄	褐	60		
6	坏	A IV	H	117	3.1		6.8 B, E, H	不	良	淡	黄	橙	70		
7	坏	A IV	H	111	3.1		8.3 B, D, E	不	普通	淡	黄	褐	90		
8	坏	A	H	120			B, E	普通	普通		橙	30			
9	坏	A IV	H	116	3.6		8.1 B, E, F, H	不	良	淡	黄	橙	80		
10	坏	A IV	H	118	3.2		8.0 B, E	不	普通	茶	黄	色	70		
11	坏	A IV	H	111	3.6		6.3 B, E, H	普通	普通	黄	黄	橙	100		
12	坏	A	H	119	3.1		6.5								
13	坏	B IV	H	120	3.6		6.0 A, B	不	良		橙	50			
14	坏	B	H	120	3.7		6.5 B, E, H	不	良	こ	げ	茶	30		
15	坏	A IV	H	120	3.2		7.8 B, E, H	不	普通	淡	黄	橙	30		
16		皿	H	139	2.3		B, E, H	普通	普通	黄	黄	褐	30		
17		碗	NS	119	3.4		5.9 B, E, I	良	好		灰	白	60		
18		碗	HS	129	3.5		B, E, I	良	好	に	ぶ	い	橙	60	
19		碗	NS	126	4.0		5.1 B, E, I	普通	普通	灰	白	白	70		
20		碗	HS	129	4.3		5.2 B, E, G	普通	普通	浅	黄	灰	70		
21		碗	NS	121	4.5		6.3 B, E, I	普通	普通	黄	黄	灰	90		
22	高台付	碗	HS	140			B, E, H	良	好	浅	黄	白	70		
23	高台付	碗	NS	139	6.5		7.1 B, E	普通	普通	灰	白	白	50		
24	高台付	碗	NS	143	5.6		6.4 B, E, I	普通	普通	灰	白	白	50		
25	高台付	碗	HS				7.7 B, E, I	普通	普通	浅	黄	黄	20		
26	高台付	皿	HS	135	3.3		7.2 B, E, I	良	好	灰	黄	黄	95		
27	高台付	皿	NS	124	2.7		6.2 B, D, H	良	好	灰	白	白	80		
28	高台付	皿	HS	131	3.3		6.7 B, E, I	良	好	に	ぶ	い	橙	50	
29	高台付	皿	S	133	2.9		6.5 B, D	良	好	灰			90		
30		蓋	S				B, C, D	不	良	淡	黄	白	色	10	紐のみ
31		蓋	NS				15.5 B, C, D	不	良	暗	黒	褐	色	10	
32		蓋	NS				15.6 D, F	普通	普通	淡	灰	色	10	破片	
33		蓋	HS				16.2 B, D	不	良	淡	橙	色	10	破片	
34		蓋	NS				7.1 D, F	不	普通	淡	灰	色	10	破片	
35	高台付	碗	K	172	5.4		7.6 D	良	好	淡	緑	灰	色	70	
36	高台付	碗	K	239	7.8		9.5 D	良	好	淡	緑	灰	色	40	金付着
37	高台付	碗	M	115			B	良	好	淡	黄	緑	10		
38		鉢	H	224	9.0		13.0 B, D, E	普通	普通		橙	10	30		
39		鉢	H	21.0	10.5		11.3 B, E	良	好	淡	黄	橙	60		
40		鉢	S	230	12.8		12.0 F, K	良	好		灰	50	カマド		
41	甕	B III b	H	195			B, E	良	好	明	赤	褐	20	貯蔵穴	
42	甕	B III c	H	18.9			B, E, H	良	好	明	赤	褐	20		
43	甕	B III b	H	19.6			B, E	良	好	明	赤	褐	15		
44	甕	B III a	H	20.4			B, C, E	良	好	明	赤	褐	50	カマド	
45	甕	底部	H				5.0 D, E	良	好	外-淡黄	褐	内-黒色	100	底部	
46	つ	ま	み	H			B, E	普通	普通	淡	黄	橙			
47	長	頸	甕	S			8.7 B, D	良	好	やや暗	い	灰	90	口縁部欠損	
48	大	甕	S	25.8			B, K	良	好	黒	灰	10	口縁のみ		
49	大	甕	S	26.6			B, G	良	好	暗	い	小豆	10	口縁のみ	
50	大	甕	S				B, D	良	好		灰	10			
51	大	甕	S	26.3			B	良	好	青	灰	10			
52	大	甕	S	27.5			B, I	良	好	青	灰	10			

第89図 第35号住居跡・出土遺物(2)



第60表 第35号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	踵	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
53	大甕	S					B, D	良好		青灰	10	
54	大甕	S	260				B, D, G	良好		青灰	20	
55	長頸壺	K					D	良好		淡灰	5	破片
	壺	S	195				B	良好		青灰	20	

第61表 第35号住居跡出土土器観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
71	にぶい褐	100	5.2	3.5	0.8	34.7	B 1	I a	46	
72	褐	90	5.6	1.7	0.5	14.1	C 1	I c	123	
73	褐	100	5.1	1.7	0.6	10.8	C 1	I a	124	
74	にぶい黄橙	100	4.8	1.7	0.3	12.1	C 1	I a	125	
75	灰	60		1.7	0.4	9.8	C 1	Ⅲ b	126	
76	にぶい黄橙	40		1.4	0.4	3.3	C 1	Ⅳ	127	
77	浅黄	50		1.3	1.0	3.5	C 1	Ⅴ	128	
78	灰	60		0.9	0.3	2.1	C 2	Ⅱ a	387	
79	褐	30		1.2	0.3	2.5	C 2	Ⅲ a	388	

5.87m・深さ0.70mと大形である。壁溝は、北東隅、北西隅、南壁から幅約21cmに検出した。小穴は6基検出し、P1～P5が主柱穴と考えた。また北東隅とカマド左脇からは不整形の土塊を検出した。

主軸方位は、N-97°Eであった。

カマドは、東壁や南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残し構築し、やや長く住居跡内に伸びていた。右袖は、凝灰岩切石を補強材として使用していた。燃焼部は、不整形円形に浅く窪まれ、中央に川原石を使用した支脚を検出した。一つ掛けカマドと考えられる。燃焼部から煙道部は、階段状に大きく段をもって移行していた。煙道部にも段を検出した。

貯蔵穴は、カマド右側南東隅で検出した。1辺1.15m、深さは0.18mの方形の貯蔵穴であった。

住居跡中央には、第1・2号鍛冶炉跡(第748図)があったことから、鍛冶工房と考えたい(鍛冶炉跡の章参照)。

遺構の切り合い関係は、第36号住居跡よりも古く、第33・34号住居跡よりも新しかった。

1から26は、土師器である。1から4は、内面に放射状暗文がみられる坏Aである。5から9は坏AⅡ、10・11・13から17・24は、坏AⅣである。12・18・19は、坏Aである。20は坏BⅡ、21は坏BⅠ、22は坏B

である。25は、土師器の皿である。26は、土師器の高台付碗である。1・2・3・4・9・12・18から20・23から26は、底部が欠損している。11は、口縁部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

27から32は、碗である。29・30は、須恵器(HS)である。他は、須恵器(NS)である。

33は、須恵器(HS)の高台付大碗である。34は、須恵器(HS)の高脚高台付碗である。35から38は、高台付碗である。35・38は須恵器(HS)で、他は、須恵器(NS)である。36は底部、38は口縁部が欠損している。

39から42は、高台付皿である。39は、須恵器(NS)、40・41は、須恵器(HS)、42は、須恵器(S)である。

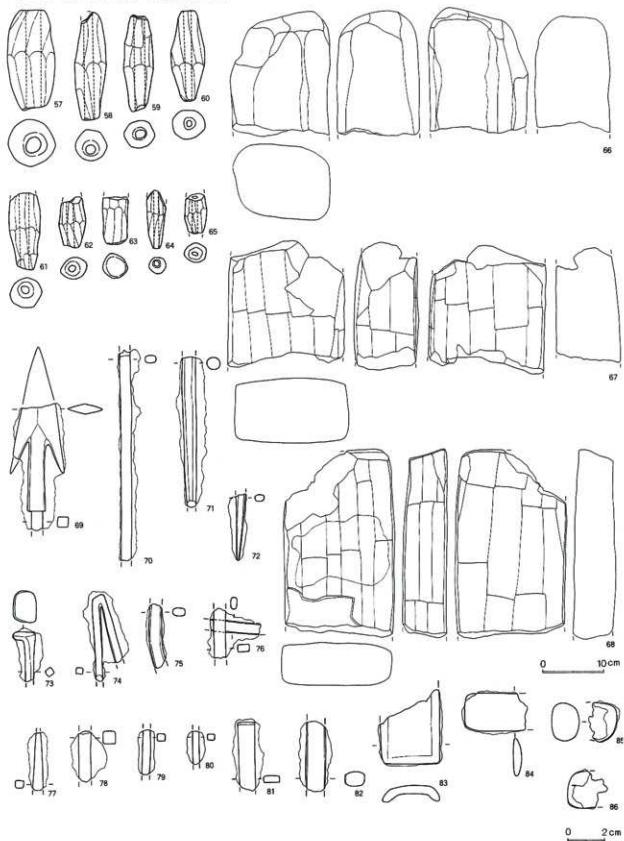
43から47は、蓋である。43は須恵器(S)、45は須恵器(HS)、ほかは須恵器(NS)である。43は紐のみ、44から47は口縁部破片である。

48・49は、灰釉陶器の高台付碗である。50は、緑釉陶器の高台付碗である。48は底部、49は口縁部、50は底部と高台が欠損している。

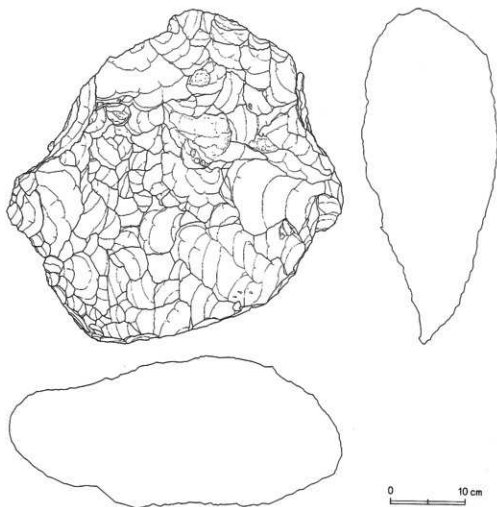
51・52は、土師器の鉢である。53は、須恵器(S)の鉢である。51は、底部が欠損している。

54から59は、土師器の甕である。60は、土師器の煮

第90図 第35号住居跡・出土遺物(3)



第91図 第35号住居跡・出土遺物(4)



沸具のつまみである。54から58は胴部中位以下、59は胴部中位以上が欠損している。

61は、須恵器(S)の長頸壺である。62から68は、須恵器(S)の大甕の口縁部である。69は、土師器の長頸壺である。70は、須恵器(S)の壺である。61は口縁部、70は胴部上位以下が欠損している。69は頸部破片である。

71から79は、土錘である。80は、砥石である。81・82は、凝灰岩の切石である。69から86は、鉄製品である。69は鉄鎌、72・73・77は釘と考えられる。70・71・74～76・78～82は棒状鉄製品、83は中央が凹む用途不明品、84は延板状鉄製品、85・86は鉄塊である。

101は、安山岩製の鉄床石である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第35号竪穴

式住居跡を中畑V期に位置付けたい。

第36号住居跡(第92図・第93図・第94図・第95図)

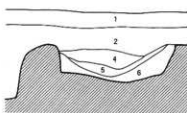
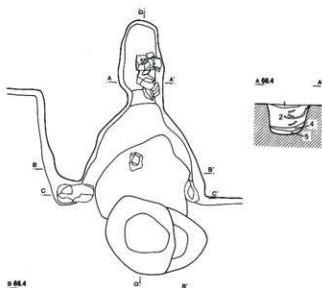
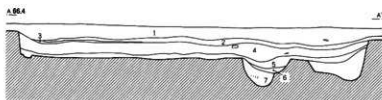
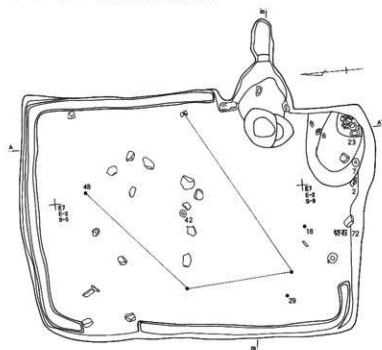
E-6・7、F-7グリッドで確認した。周辺には、住居跡や土城が密集し、確認に手間取った。しかし、覆土上面に堆積した火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺5.45m・短辺3.97m・深さ0.50mであった。幅20cmの壁溝を、カマドと貯蔵穴部分を除き検出した。

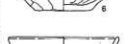
主軸方位は、N-97°-Eであった。

カマドは、東壁の南東隅寄りに検出した。左袖は短く、地山を掘り残り構築し、右袖は、住居の壁をそのまま利用していた「片袖型」である。両袖の先端には、川原石が補強材として使用されていた。燃燒部のほぼ

第92図 第36号住居跡出土遺物(1)



- 第36号住居跡
- 1 暗褐色土 日輝石を多量に含む砂質
 - 2 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む。白色粒子を多量に含む
 - 3 灰褐色土 焼土粒子、白色粒子を少量含む
 - 4 暗褐色土 焼土、焼土粒子を多量に含む
 - 5 赤褐色土 炭化物を少量含む 焼土層(天井部遺跡土)
 - 6 暗灰色土 炭化物層(竈壁部内の残)
 - 7 暗灰色土 6層の吹き出しによる堆積層(カマドの前壁ピット内の覆土)

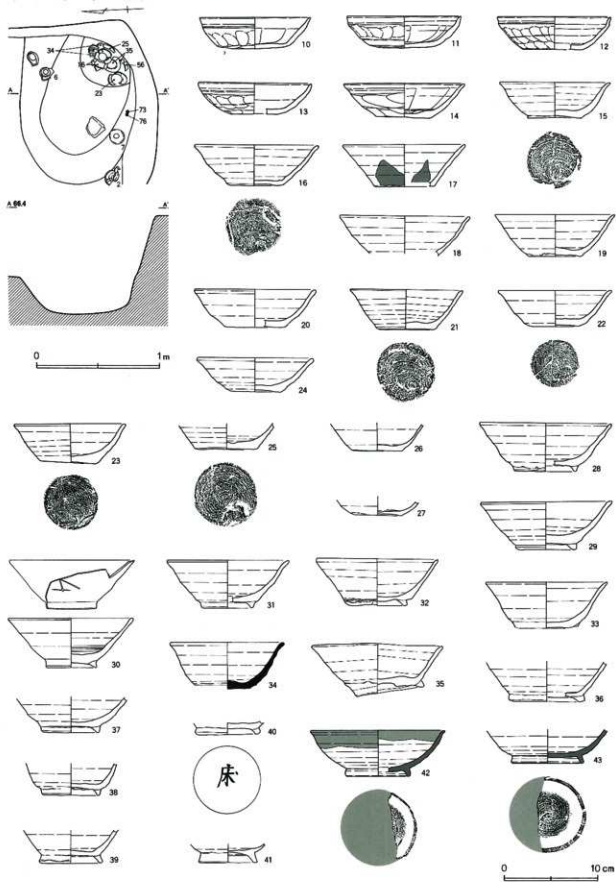


0 1m

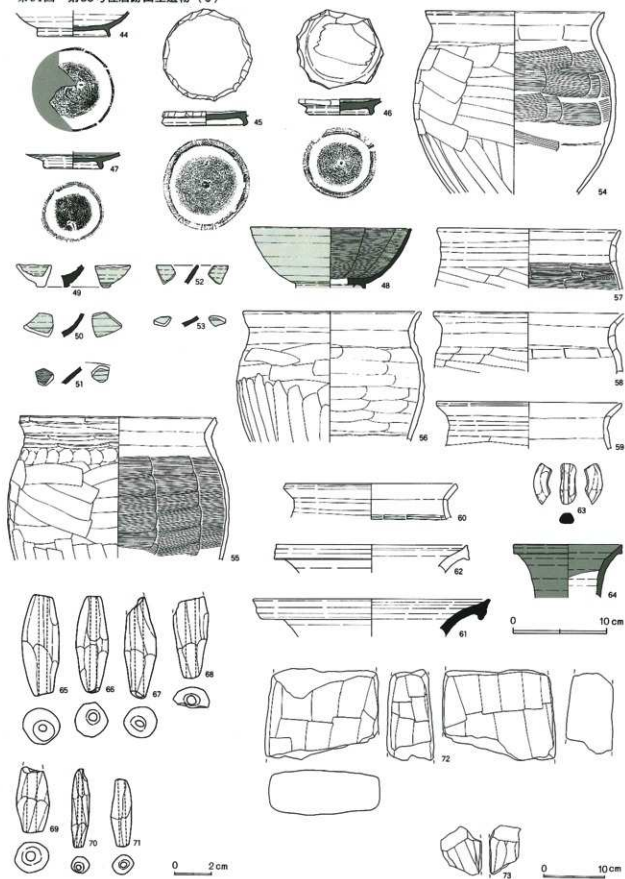
0 50cm

0 5cm

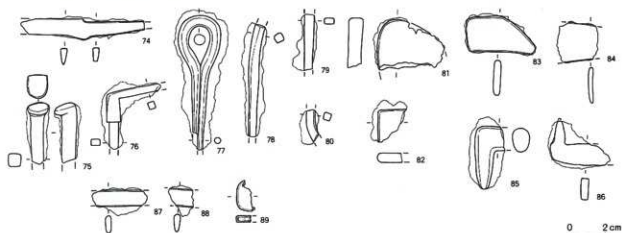
第93图 第36号住居跡貯藏穴・出土遺物(2)



第94图 第36号住居跡出土遺物（3）



第95図 第36号住居跡出土遺物(4)



中央には、川原石を使用した支脚が出土した。一つ掛けカマドであろう。焚き口部から燃焼部にかけては、極く浅く不整形に窪んでいた。また焚き口部の前面には、径0.58m・深さ0.42mの小穴があった。炭化物が大量に出土した。燃焼部から煙道部は緩やかな傾斜をもって移行し、段はみられなかった。煙道部には、土師器甕(54)が補強材として使用されていた。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅で検出した。形状は不整形円形で、長径1.2m・短径0.9m・深さ0.3mであった。隅の部分で一段深くなっていた。

遺構の切り合い関係は、第35・37号住居跡より新しかった。

遺物は、貯蔵穴内から土師器杯(2・6・7)・須

恵器杯(11・18・20)・須恵器高台付碗(29・30)土師器甕(55)・把手(73)・鉄製品(76)が出土した。

1から9は、土師器の杯である。1は杯A V、4・5は杯A、2・6は杯B I、7は杯B II、3・8・9は、杯B Vである。4・5は、底部が欠損している。

10から22は、碗である。10は須恵器(S)、11・12・19は須恵器(HS)、ほかは須恵器(NS)である。23から36は、高台付碗である。29は須恵器(S)、26・30から32は須恵器(HS)、ほかは須恵器(NS)である。35は、底部外面に墨書「床」がみられる。12・13・15・23・26は底部、20・22・32から34は口縁部、28・29は高台、31は口縁部と底部が欠損している。35・36は底部のみである。12は、体部から底部にかけて黒

第62表 第36号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	径	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	杯	A V	H	12.6	4	6.2	B, E	普通		淡赤褐	30	掘り方中
2	杯	B I	H	12.4	3.5	6.1	B, E	普通		暗茶褐	60	
3	杯	B V	H	13	3.6	6.3	B, D, E	普通		黄橙	30	掘り方中
4	杯	A	H	12.5			B, D, E	普通		淡黄橙	20	
5	杯	A	H	13.2			B, E, H	不良		暗黄橙	30	掘り方中
6	杯	B I	H	11.5	4.2	6	B, E	普通		こげ茶	50	
7	杯	B II	H	11.3	4.5	5	B, E, F	普通		暗橙	100	
8	杯	B V	H	11.8	3.8	5	B, E, F	普通		明橙	70	
9	杯	B V	H	11.9	3.6	5.5	B, E, F	普通		明橙	80	
10	杯	A V	H	11.7	3.3	5.8	B, E, F, H	普通		明橙	70	
11	杯	A V	H	11.9	3.4	5.9	F, H	普通		こげ茶	30	
12	杯	A	H	11.9	3.5	6.2	B, E, H	普通		こげ茶	20	
13	杯	B IV	H	11.8	3.3	5.1	B, E, H	普通		黄褐	20	

第63表 第36号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他		
14	坏	B	H	12.6	3.7	5.7	B, D, E, H	普通		橙	30			
15	椀	S	S	11.6	3.8	5.4	B, E, G	良好	R	灰	褐	40		
16	椀	HS	HS	12.9	4.3	5.0	B, E	普通	R	淡	黄	70	貯蔵穴	
17	椀	HS	HS	12.7	4.4	6.1	B, E, G	普通	L	にぶい黄橙	20			
18	椀	NS	NS	13.8			B, E	普通	R	黄	灰	20		
19	椀	NS	NS	12.7	4.4	5.5	B, E, I	普通	R	灰	白	30		
20	椀	NS	NS	12.8	4.0	6.4	B, I	普通	R	灰	白	20		
21	椀	NS	NS	11.8	4.2	6.0	B, G, I, K	良好	R	明	灰	褐	90	
22	椀	NS	NS	11.9	3.8	5.0	B, E, G	良好	R	灰	白	40		
23	椀	NS	NS	11.6	4.3	6.0	B, C, D, I	良好	R	灰	褐	80		
24	椀	HS	HS	12.1	3.6	5.2	B, C, E, H	良好	R	外-淡橙。 内-暗褐	70			
25	椀	NS	NS			6.5	B, D, E, I	良好	R	灰	100	底部。貯蔵穴		
26	椀	NS	NS			5.3	B, E, I	良好	R	褐	灰	掘り方中		
27	椀	NS	NS			5.0	E	普通	R	褐	灰	20		
28	高台付椀	NS	NS	13.8	5.1	6.3	B, E, I	普通	R	灰	白	40		
29	高台付椀	NS	NS	13.7	5.2	6.0	B, C, D, E, I	良好	R	灰	100			
30	高台付椀	NS	NS	13.0	5.2	5.3	B, D, E, G	良好	R	灰	褐	40	ヘラ書き「本」	
31	高台付椀	HS	HS	12.8	5.1	5.2	B, E, H, K	良好	R	外-明褐。 内-黒	25	掘り方中		
32	高台付椀	NS	NS	12.9	5.0	5.9	B, E, I	普通	L	黄	灰	60		
33	高台付椀	NS	NS	12.7			B, E, G	普通	R	褐	灰	30		
34	高台付椀	S	S	12.0			B, I	良好	R	灰	50			
35	高台付椀	HS	HS	13.5	5.5	6.9	B, C, D, I	普通	R	灰	白	90		
36	高台付椀	HS	HS			6.9	B, E, I	良好	R	にぶい褐	20			
37	高台付椀	HS	HS			5.6	B, E, I	普通	L	にぶい橙	40	カマド		
38	高台付椀	NS	NS			5.8	B, E, I	普通	R	灰	白	30		
39	高台付椀	NS	NS			6.4	B, E, I	普通	L	灰	白	30		
40	高台付椀	NS	NS			6.4	B, E, H	良好	R	灰	白	100	底部。墨書「床」	
41	高台付椀	NS	NS			6.1	B, E	普通	R	橙	10			
42	高台付椀	K	K	14.1	4.9	6.6	B, D	良好	R	淡	灰	20		
43	高台付椀	K	K			7.3	D	良好	R	淡	灰	20		
44	高台付椀	K	K			7.5	B, D	良好	R	淡	灰	褐	30	
45	高台付椀	K	K			8.2	B, D	良好	R	淡	灰	褐	20	
46	高台付椀	K	K			6.6	B, D	良好	R	淡	灰	20	掘り方中	
47	高台付椀	K	K			5.9	B	良好	R	淡	灰	20	掘り方中	
48	高台付椀	M	M	11.8			B, D	良好	R	淡	緑	5		
49	高台付椀	M	M				B	良好	R	淡	緑	5		
50	高台付椀	M	M				B	良好	R	淡	緑	5		
51	高台付椀	M	M				B	良好	R	淡	緑	5		
52	高台付椀	M	M				B	良好	R	淡	緑	5		
53	高台付椀	M	M				B	良好	R	淡	緑	5		
54	甕AⅢb	H	H	18.8			B, E, K	普通	明	橙	60	カマド		
55	甕BⅢa	H	H	20.6			B, D, E, K	普通		橙	30	カマド		
56	甕AⅢb	H	H	18.9			B, E, H	普通	暗	黄	橙	30	貯蔵穴	
57	甕AⅢc	II	II	19.2			E, H, I	良好	明	赤	褐	20	掘り方中	
58	甕AⅢc	II	II	20.2			D, E, H	良好	明	赤	褐	20		
59	甕B	H	H	19.5			B, D, E	良好	明	淡	橙	20		
60	甕B	H	H	18.0			B, C, D, E, H	良好	明	赤	褐	20		
61	須恵窯口縁	S	S				B, H	良好	外-青灰褐。 内-灰		5	掘り方中		
62	須恵窯口縁	NS	NS				B, C, E, G	良好	明	青	褐	10	貯蔵穴	
63	把手	S	S				B	良好	明	青	褐	10		
64	長頸壺	K	K	11.4			D	良好	明	淡	灰	10	掘り方中	

第64表 第36号住居跡出土土鐘観察表

番号	色	調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
65	黄	橙	100	5.4	1.9	0.4	18.3	B 1	II a	47	
66	に	ぶ	100	5.2	1.9	0.4	14.0	C 1	I b	129	
67	に	ぶ	80		1.8	0.5	11.8	C 1	I b	130	
68	に	ぶ	40			0.5	7.6	C 1	VI	131	
69	浅	黄	70		1.8	0.5	9.7	C 1	I c	132	
70	灰	白	100	4.2	1.0	0.3	2.5	C 2	I b	389	
71	褐	灰	100	3.5	1.8	0.4	3.8	C 2	I a	390	

色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

37から45は、灰釉陶器である。44・45は、高台付皿碗であり、ほかは高台付碗である。37は、金泥が内面に付着している。第112号住居跡の覆土中の破片と接合した。42・43は、転用碗である。37・38は底部、39から45は口縁部が欠損している。

46から51は、緑釉陶器の高台付碗である。46は、底部が欠損している。47から51は、体部破片である。

52から59は、土師器の甕である。60は、須恵器(HS)の羽釜である。61は、須恵器(S)の甕である。62は、須恵器(NS)の甕である。63は、把手である。64は、灰釉陶器の長頸壺である。52・53は胴部下位以下、54・55は胴部中位以下、56・57・60は胴部上位以下が欠損している。58・59・61・62・64は、口縁部のみである。

65から71は、土鐘である。72・73は、凝灰岩の切石である。74から88は、鉄製品である。74は刀子、75は釘、76・77は用途不明の鉄製品、78・79・80は棒状鉄製品、81・82・83・84・87・88は板状及び延板状鉄製品、85は鏡の破片、86は麻皮剥ぎの破片と思われる。89は銅製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第36号壑穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第65表 第37号住居跡出土土鐘観察表

番号	色	調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
51	浅	黄	80		1.7	0.5	11.8	C 1	II b	133	
52	浅	黄	70	5.0	1.9	0.4	12.0	C 1	V a	134	
53	灰	黄	100	4.7	1.8	0.4	13.1	C 1	I a	135	
54	浅	黄	100	4.0	1.7	0.4	11.0	C 1	I b	136	

第37号住居跡 (第96図・第97図)

E・F-6・7グリッドで確認した。周辺は、住居跡や土城が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺4.15m・短辺4.30m・深さ0.17mであった。

主軸方位は、N-35°-Wであった。

カマドは、東壁南東隅寄りに検出した。燃焼部内からは、構築材に使用した川原石が、まとまって出土した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

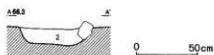
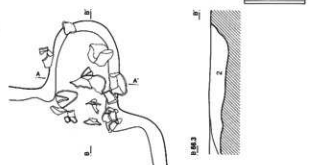
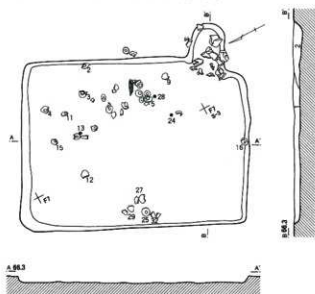
遺構の切り合い関係は、第36号住居跡、第118・135・142・186・187号土城よりも古かった。

遺物は、住居跡の東側から土師器環(2・3・4・5・9・11・15・23・27)が出土し、また西壁の中央付近から土師器環(24・26・28・31)がまとまって出土した。

1から33は、土師器である。1から17、21から33は、坏Bである。そのうち6は坏B I、7・14は坏B IIである。そのほかは、坏B Vである。また21から33は、地鎮に伴う一括埋納の可能性もある。18・20は、高台付の坏A、19は、高脚高台付の坏Bであろう。1・8は底部、18は底部と高台、19は高台、20は口縁部が欠損している。

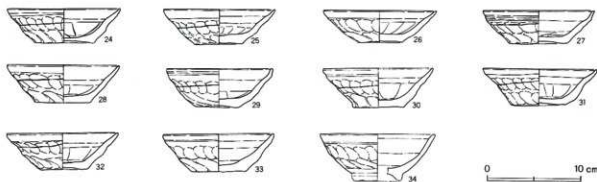
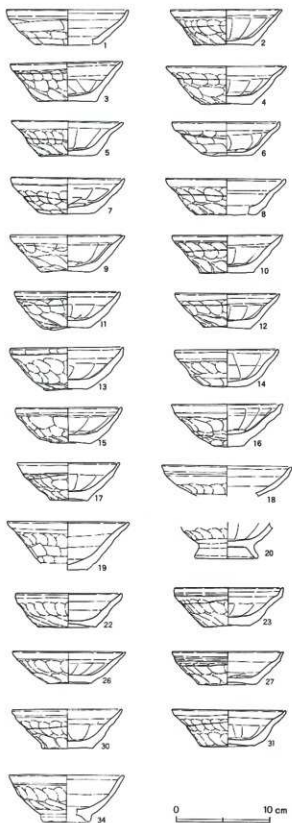
34から36は、碗である。36は須恵器(HS)、ほか

第96図 第37号住居跡出土遺物(1)

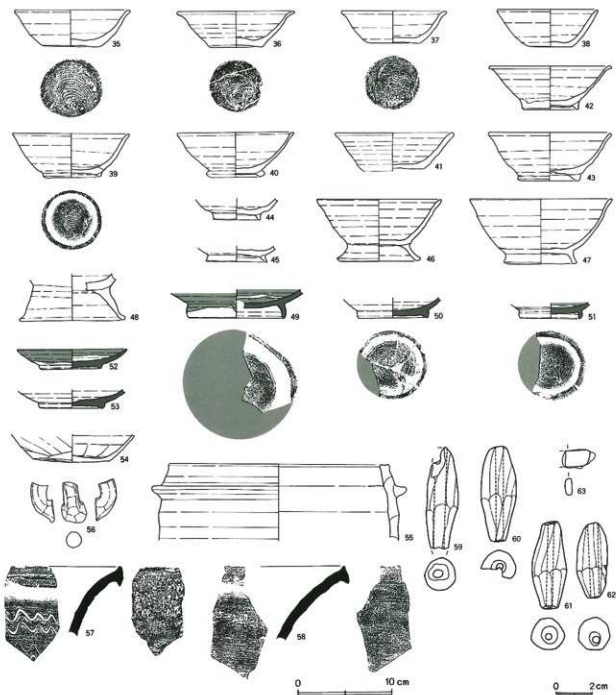


第37号住居跡

- 1 暗褐色土 炭上粒子、炭化物を多量に含む 粘りあり
2 暗褐色土 炭上粒子、炭化物を微量含む 粘りあり



第97図 第37号住居跡出土遺物（2）



は須恵器（NS）である。37から43は、高台付碗である。39は須恵器（NS）、ほかは須恵器（HS）である。44は、須恵器（HS）の高脚高台付碗である。45・46は、灰胎陶器の高台付碗である。39は高台、42・43・46は口縁部、44・45は口縁部と底部が欠損している。47は、土師器の壺である。48は、土師器の把手であ

る。49・50は、須恵器（S）の大甕の口縁部である。47は、底部のみである。

51から54は、土錘である。55は、鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第37号竪穴式住居跡を中壩Ⅶ期に位置付けたい。

第66表 第37号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器 種	種別	口径	器高	胴	底径	胎 土	焼 成	轆轤	色 調	残存	出土位置その他
1	坏	A	H	129	3.7		7.0	B, E	良 好	暗 赤 褐	20	
2	坏	B V	H	116	3.8		6.2	B, E, H	良 好	淡 橙	90	
3	坏	B V	H	118	4.2		6.3	B, E, H	良 好	淡 橙	70	
4	坏	B V	H	126	4.0		5.5	B, D, E	普 通	橙	80	
5	坏	B V	H	117	3.7		5.9	B, E, H	良 好	暗 赤 橙	100	
6	坏	B I	H	113	3.6		5.1	B, E		淡 黄 褐	70	
7	坏	B II	H	119	3.8		5.8	B, E, F	良 好	茶	40	
8	坏	B V	H	126	3.8		5.8	B, D, E	普 通	黄 橙	70	
9	坏	B V	H	120	3.9		5.2	B, E, H	普 通	淡 黄 褐	90	
10	坏	B V	H	116	4.0		5.7	B, E, H	不 良	淡 橙	30	
11	坏	B V	H	110	4.1		4.2	B, E, H	普 通	淡 黄	100	
12	坏	B V	H	110	3.7		5.0	B, E, H	普 通	淡 橙	90	
13	坏	B V	H	118	4.5		4.6	B, E, H	普 通	淡 黄	90	
14	坏	B II	H	108	3.9		4.8	B, E, H	普 通	暗 黄 褐	20	
15	坏	B V	H	112	3.8		4.2	B, E, F	良 好	淡 橙	70	
16	坏	B V	H	118	4.5		3.1	B, E	普 通	淡 橙	90	
17	坏	B V	H	108	4.0		4.0	B, E, F	普 通	淡 橙	40	
18	高台付坏	A	H	137				B, E	普 通	茶 褐	20	
19	高脚高台付坏	B	H	128				B, C, E	不 良	橙	30	
20	高台付坏	B	H				6.5	B, E, H	普 通	暗 橙	40	
21	坏	B V	H	112	3.8		5.7	B, E, H	普 通	淡 橙	60	
22	坏	B V	H	111	3.6		6.1	B, E	普 通	淡 橙	70	
23	坏	B V	H	114	4.0		4.9	B, E	普 通	淡 橙	40	
24	坏	B V	H	119	3.6		5.3	B, C, E	普 通	淡 橙	60	
25	坏	B V	H	117	3.7		5.0	B, E	普 通	淡 橙	40	
26	坏	B V	H	119	3.3		4.6	B, C, E	普 通	淡 橙	50	
27	坏	B V	H	118	3.5		6.2	B, E	普 通	淡 橙	60	
28	坏	B V	H	118	3.9		6.1	B, E, H	普 通	淡 橙	70	
29	坏	B V	H	112	4.1		4.3	B, E	普 通	淡 橙	50	
30	坏	B V	H	113	4.2		5.4	B, E	普 通	淡 橙	60	
31	坏	B V	H	119	3.8		5.9	B, E, H	普 通	淡 橙	50	
32	坏	B V	H	118	3.8		4.9	B, E	普 通	淡 橙	40	
33	坏	B V	H	114	4.1		4.8	B, E	普 通	淡 橙	30	
34	高台付坏	A	H	120	5.0		4.8	C, D, E	普 通	淡 黄	20	
35	碗	NS	NS	119	3.9		6.3	B, I	普 通	灰 白	80	
36	碗	NS	NS	123	3.8		5.3	B, C, H	良 好	灰 白	60	
37	碗	HS	HS	111	3.4		5.4	B, E, I	普 通	灰 白	70	
38	碗	NS	NS	105	4.0		4.5	B, E	良 好	灰	75	
39	高台付碗	HS	HS	123	4.7		5.8	B, E, I	良 好	にぶい	100	
40	高台付碗	HS	HS	124	4.7		5.3	B, E, I	普 通	にぶい	60	
41	高台付碗	NS	NS	124			A, B, C, E		良 好	灰	80	
42	高台付碗	HS	HS	127	4.6		5.6	B, E, I	良 好	灰 黄	50	
43	高台付碗	HS	HS	129	5.1		5.7	B, E, I	普 通	にぶい	80	
44	高台付碗	HS	HS				4.8	B, E, I	普 通	灰 黄	20	
45	高脚高台付碗	HS	HS				10.9	B, E, I	普 通	にぶい	20	
46	高脚高台付碗	HS	HS	133	6.6		8.1	B, E, I	普 通	灰 黄	50	
47	高台付大碗	HS	HS	149	6.8		7	B, E, I	普 通	外-灰白。 内-にぶい	60	
48	高台付碗	HS	HS				6.3	B, E, I	普 通	にぶい	20	
49	高台付碗	K	K				9.9	B	良 好	灰	20	
50	高台付碗	K	K				7.3	D	不 良	淡 黄 灰	20	
51	高台付碗	K	K				6.2	B, D	良 好	灰	20	

第 67 表 第 37 号住居跡出土遺物観察表 (2)

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
52	高台付皿	K	11.5	2.2		6.2	B, D	良好		淡灰	60	
53	高台付碗	K				6.5	B, D	良好		淡灰	20	
54	蓋	H				8.0	A, B, E	普通		暗褐色	20	
55	羽 II B b	H S	23.1		2.7		B, C, D, E	良好		暗褐色	25	
56	把手	H					B	良好		浅黄	5	
57	大甕	S					B	良好		灰	5	
58	大甕	S					B, I	良好		灰	5	

第38号住居跡 (第98図・第99図)

F-5・6ドリッドで確認した。周辺は、住居や土壌が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、やや不整な長方形である。規模は、長辺4.27m・短辺3.71m・深さ0.39mであった。北壁のやや東寄りに、径0.95m・深さ0.2mの不整形の土壌を検出した。

主軸方位は、N-98°-Eであった。

カマドは、東壁やや南寄りに検出した。袖は、地山

を掘り残して構築し、住居跡内へと長く伸びていた。

焚き口部から燃焼部にかけては、不整形の浅い掘り込みがみられた。この掘り込みは、燃焼部の奥に向かって、深くなっていた。燃焼部から煙道部へは、急激に立ち上がり、段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第63号土壌より古かった。

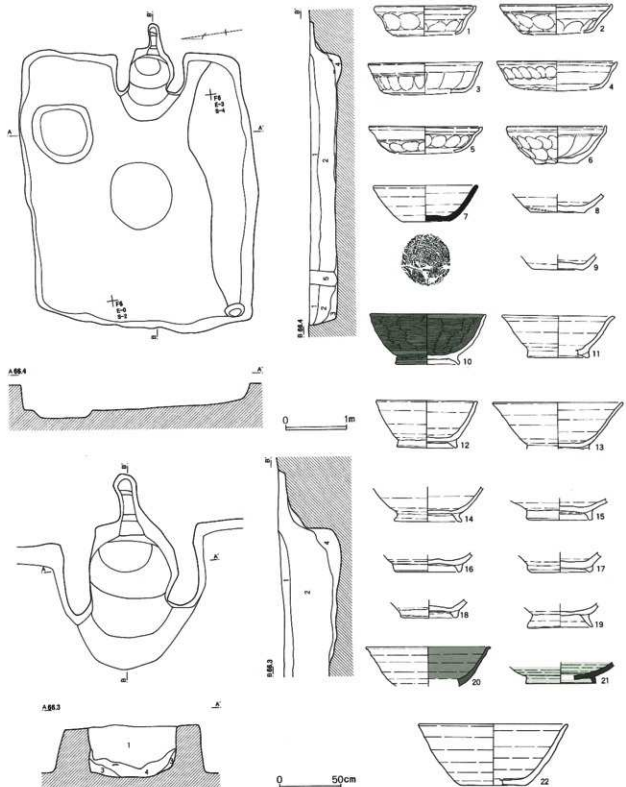
1から5は、土師器の坏Aである。6は、土師器の坏BVである。1から5は底部が欠損している。

7から9は、碗である。7は須恵器(S)、8は須

第 68 表 第 38 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A	H	106	3.2	6.7	B, E, H	不良		暗黄褐	20	
2	坏	A	H	118	3.2	7.0	B, E	良好		淡橙	30	
3	坏	A	H	12.1	3.4	7.4	B, E	普通		黄褐	20	
4	坏	A	H	12.7		9.1	B, E	普通		暗赤褐	40	
5	坏	A	H	11.9	2.8	7.0	B, D, E	普通		黄褐	10	
6	坏	B V	H	10.4	4.9	4.4	B, E, F, H	良好		淡橙	40	
7	碗	S		11.0	3.8	5.0	B, E, I	良好	R	灰白	80	
8	碗	NS				5.8	B, I	良好	R	灰白	20	
9	碗	HS				5.4	E, I	普通	R	にぶい黄橙	20	
10	高台付碗	黒色	12.3	5.3		6.5	B, G, I	良好	R	オリーブ黒	40	
11	高台付碗	NS	13.8				B, E, I	普通	R	褐灰	40	
12	高台付碗	NS	11.8	4.4		6.3	B, E	良好	R	褐灰	20	
13	高台付碗	HS	10.5	5.0		6.1	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	60	
14	高台付碗	NS				7.0	B, E, I	普通	R	灰白	30	
15	高台付碗	NS				6.5	B, E, I	良好	R	灰白	20	
16	高台付碗	HS				6.7	B, E, I	普通	L	にぶい橙	10	
17	高台付碗	HS				6.1	E, G, I	良好	R	灰白	20	
18	高台付碗	NS				5.7	B, E	良好	R	灰白	20	
19	高台付碗	NS				6.8	B, E, I	良好	R	にぶい橙	20	
20	高台付碗	K	13.0				B	良好		淡灰	10	
21	高台付碗	M				7.1	A	良好		淡緑	10	
22	碗	NS	15.7	6.5		7.0	B, E, I	普通	R	灰黄褐	20	
23	鉢	H	19.9				B, E, K	良好		淡橙	20	
24	甕 B III a	H	20.4				B, E	良好		オレンジ	10	口縁部のみ
25	甕	S				14.0	B	良好		灰	5	底部のみ

第98図 第38号住居跡・出土遺物(1)

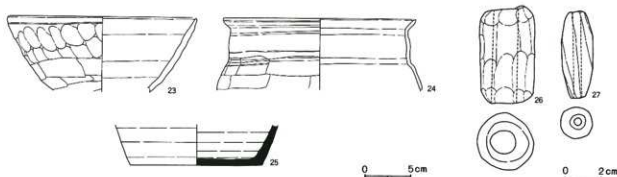


第38号住居跡

- 1 赤褐色土 磁土、炭化物を微量含む 粘性あり
- 2 褐色土 磁土、炭化物を少量含む 粘性あり
- 3 灰色土 磁土を微量含み、炭化物を多量に含む 粘性あり (炭化物層)
- 4 赤褐色土 土器片含む (天井部磁土)
- 5 暗黒色土 礫石を含む (ピット底土)

0 10 cm

第99図 第38号住居跡出土遺物(2)



恵器(NS), 9は須恵器(HS)である。10は、黒色土器の高台付碗である。11から19は、高台付碗である。13・16・17は須恵器(HS)、ほかは須恵器(NS)である。22は、大形の須恵器(NS)の碗である。8・9・14から19は口縁部、11・22は底部、10は高台が欠損している。13は、内外面に黒色処理が施されている。

20は、灰釉陶器の高台付碗である。21は、緑釉陶器の高台付碗である。20は底部と高台、22は口縁部と底部が欠損している。

23は、土師器の鉢である。24は、土師器の甕である。23は底部、24は胴部上位以下が欠損している。

25は、須恵器(S)の甕の底部である。

26・27は、土錘である。

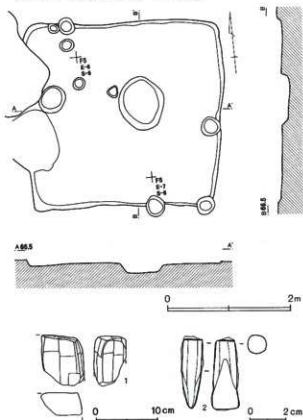
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第38号竪穴式住居跡を中堀N期に位置付けたい。

た。また、北西隅で4基、南東隅で3基の小穴を検出した。

主軸方位は、 $N-6^{\circ}-E$ であった。

カマドは、検出されなかった。

第100図 第39号住居跡・出土遺物



第39号住居跡(第100図)

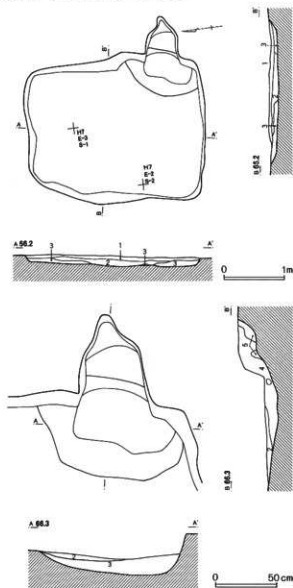
F-5グリッドで確認した。周辺は、小穴や土塊が多く、確認に手間取った。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.08 m・短辺2.93 m・深さ0.08 mであった。住居跡のはば中央に径0.8 m・深さ0.2 mの不整形円の土塊を検出し

第69表 第38号住居跡出土土錘観察表

番号	色	測	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他		
26	に	ぶ	い	桜	100	5.2	3.0	1.3	51.8	A 1	I a	5	
27	に	ぶ	い	貴	桜	100	4.6	1.7	0.4	12.2	C 1	I a	137

第101図 第40号住居跡・出土遺物



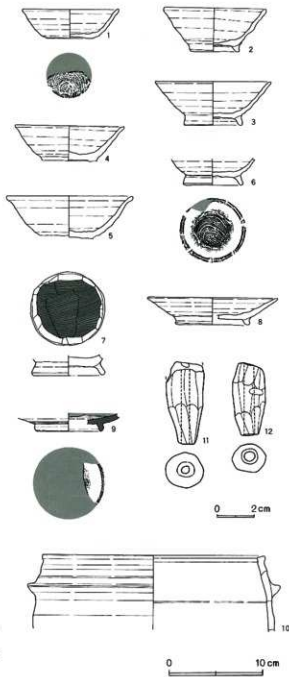
第40号住居跡

- 1 暗褐色土、黄土ブロックを多量に含む、砂礫
 7少量含む、粘性あり
 2 暗褐色土、黄土ブロック、炭化物を少量含む、
 黄土砂子を微量含む、粘性あり
 3 灰褐色土、黄土ブロック、黄白色砂子を少量
 含む、黄褐色粘土を多量に含む、粘性あり
 4 灰褐色土、黄土ブロックを多量に含む、黄白
 色砂子を少量含む、粘性あり
 5 暗褐色土、黄土砂子、黄土ブロックを多量に
 含む、カマドの磚粘土で黄白色砂子を微量含
 む

遺構の切り合い関係は、第66・69土壌より古く、第19・22土壌より新しかった。

1は、凝灰岩の切石である。2は、鉄製品の楔である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第39号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。



第40号住居跡 (第101図)

H-7グリッドで確認した。周辺は、溝や小穴・土壌などの遺構が密集していた。

住居跡の形状は、やや不整な長方形であった。規模は、長辺2.86m・短辺2.39m・深さ0.15mであった。主軸方位は、N-98°-Eであった。

カマドは、東壁南東隅寄りに検出した。袖は、検出

第70表 第40号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	踵	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	碗	HS	10.1	3.1		4.9	B, E	良好		浅黄橙	40	
2	高台付碗	HS	10.8	4.6		4.9	B, C, E	普通		灰	90	
3	高台付碗	NS	12.1	4.6		6.0	B, E, I	普通		灰	25	
4	高台付碗	NS	11.5				B, E	良好		灰白	60	
5	高台付碗	HS	13.2				B, E	良好		灰黄	30	
6	高台付碗	HS				5.9	B, E	良好		灰黄褐	30	
7	高台付碗	黒色				7.2	B, E	良好		橙	100	
8	高台付皿	HS	13.6	2.9		7.5	B, E	良好		黄灰	50	
9	高台付皿	K				6.8	B, D	良好		暗灰	10	
10	羽B II b	HS	23.2		3.2		B, E	良好		橙	10	

第71表 第40号住居跡出土土錫観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他	
8	褐	灰	50		2.0	0.4	13.2	B 1	II a	48	
9	褐	灰	60		1.8	0.6	9.8	B 1	II a	49	

できなかった。焼成部は、不整形な掘り込みがみられ、奥に向かって緩やかに傾斜していた。焼成部から煙道部へは、緩い段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第41号住居跡よりも新しかった。

1から4は、高台付碗である。2は、須恵器(NS)である。他は、須恵器(HS)である。3は高台、4は口縁部が欠損している。

5は、黒色土器の高台付碗である。6は、灰粘陶器の高台付皿である。5は、底部のみである。6は、口縁部と底部が欠損している。

7は、須恵器(HS)の羽釜である。7は、胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第40号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第41号住居跡(第102図)

H-6・7グリッドで確認した。周辺は、溝・掘立柱建物跡などの遺構が密集し、確認に手間取った。覆土上層の火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺4.20m・短辺3.15m・深さ0.29mであった。幅30cmの壁溝を、西壁の一部で検出した。そのほか北東隅で径1mの円形の土壇を検出し、北西隅付近で小穴1基を検出した。

主軸方位は、N-95°-Eであった。

カマドは、東壁南東隅寄りに検出した。左袖は、地山を掘り残して造られ、右袖は、住居跡の壁をそのまま利用していた。「片袖型」である。焼成部は、不整形に浅く窪み、段をもって煙道部に移行していた。

遺構の切り合い関係は、第40号住居跡より古く、第161号土壇より新しかった。

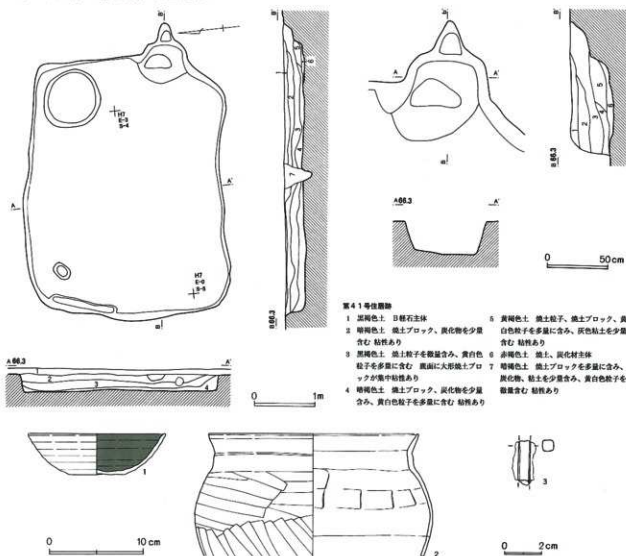
1は、須恵器(HS)の碗である。2は、須恵器(NS)の高台付碗である。3は、須恵器(HS)の高台付皿である。4は、黒色土器の碗である。2は高台、3は底部が欠損している。

5は、土師器の甕である。5は胴部上位以下が欠損している。

6は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第41号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第102図 第41号住居跡・出土遺物



第41号住居跡

- 1 黒褐色土 日粒石主体
 2 赤褐色土 焼土ブロック、炭化物を少量含む 粘性あり
 3 黒褐色土 焼土粒子を微量含む、黄白色 粒子を多量に含む 裏面に大形焼土ブロックが集中粘性あり
 4 赤褐色土 焼土ブロック、炭化物を少量含む、黄白色粒子を多量に含む 粘性あり
 5 黄褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、黄白色粒子を多量に含む、灰色粘土を少量含む 粘性あり
 6 赤褐色土 焼土、炭化材主体
 7 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む、炭化物、粘土を少量含む、黄白色粒子を微量含む 粘性あり

第72表 第41号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	碗	黒色	14.5	4.3	6	B, C, E	良好	内一灰、外一橙	70		
2	甕 B II a	H	21.8			B, C, E, H	良好	橙	15		

第42号住居跡 (第103図・第104図)

H・I-6グリッドで確認した。周辺は、溝・土塊・小穴などが密集し、確認に手間取ったが、覆土上層の火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺3.75m・短辺2.97m・深さ0.19mであった。カマド左脇に半円形の張り出し部を検出した。

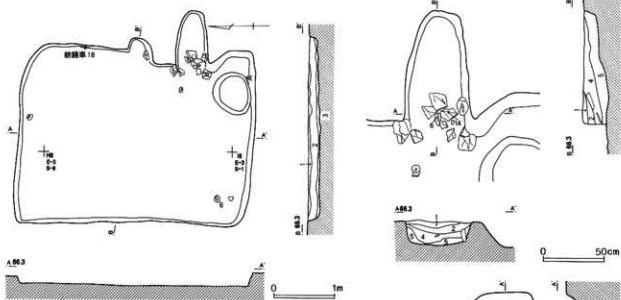
主軸方位は、N-90°-Eであった。

カマドは、東壁南東隅寄りに検出した。焚き口部の両脇から、補強材の川原石が出土した。袖は造らなかつたと考えられる。燃焼部はやや細長く、底面の掘り込みはみられなかった。カマドの構築材である拳大の川原石が、燃焼部内から出土した。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅で検出した。形状は、円形で径0.59m・深さ0.18mであった。

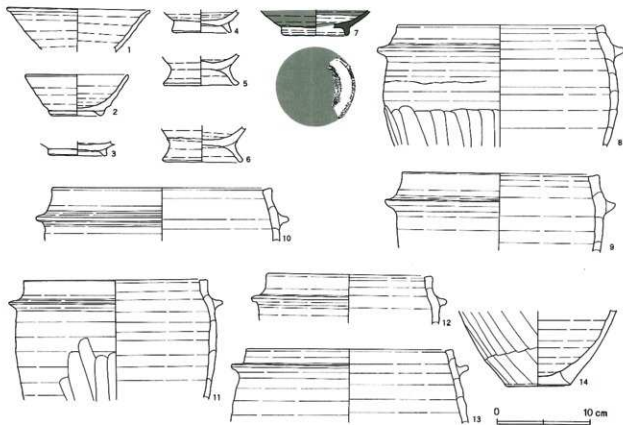
遺構の切り合い関係は、第164・166・167・168・169

第103図 第42号住居跡・出土遺物(1)

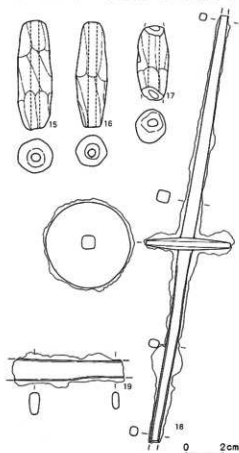


第42号住居跡

- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1 黒色土 磁石を多量に含む 砂質 | 5 暗赤褐色土 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり |
| 2 暗こげ茶色土 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり | (天井部) |
| 3 暗こげ茶色土 黄褐色土を多量に含む | 6 暗茶褐色土 炭化物類 |
| 4 赤色土 焼土ブロック層 | 7 暗褐色土 砂粒を含む 粘性あり |



第104図 第42号住居跡・出土遺物(2)



号土壌より古く、第177号土壌より新しかった。

カマド内から高脚高台付き椀(6)・羽釜の底部(14)が出土した。また、東壁のやや北寄りの壁際から鉄製の紡錘車(18)が出土した。

1から4は、須恵器(HS)の高台付椀である。5・6は、須恵器(HS)の高脚高台付椀である。7は、灰釉陶器の高台付椀である。1は底部と高台、3から6は口縁部、7は口縁部と底部が欠損している。

8から14は、羽釜である。10・13は、須恵器(NS)、他は須恵器(HS)である。8・11・13は胴部中位以下、9・10・12は胴部上位以下、14は胴部中位以上が欠損している。

15から17は、土鍾である。

18・19は、鉄製品である。18は紡錘車、19は延板状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第42号堅穴式住居跡を中壙Ⅱ期に位置付けた。

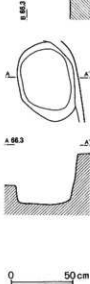
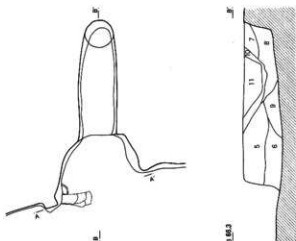
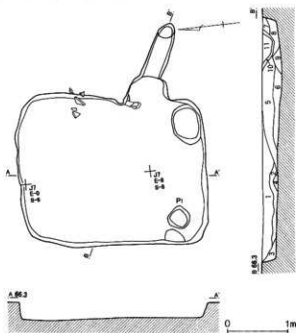
第73表 第42号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	15.1				B, E, H, K	普通	R	外-淡黄褐、内-明褐色	50	底部のみ 底部
2	高台付椀	HS	10.7	4.3		5.1	B, E, H, K	良好	R	灰白	60	
3	高台付椀	HS				5.7	B, C, E	良好	R	淡褐色	100	
4	高台付椀	HS				5.8	B, C, I	良好	R	明赤褐色	70	
5	高脚高台付椀	HS				7.8		良好	R	淡褐色	100	
6	高脚高台付椀	HS				8.1	B, E, G	普通	R	にぶい黄褐色	20	
7	高台付椀	K				6.4	B, D	良好	R	暗灰	20	
8	羽BⅡa	HS	21.7		2.8		A, B, E, H	良好	R	明褐色	50	
9	羽AⅡb口	HS	20.7		3.0		B, C, E	良好	R	淡褐色	15	
10	羽AⅡa	NS	23.1		3.3		B, C, E	良好	R	黒	10	
11	羽AⅠb口	HS	19.3		2.4		B, C, E, H	良好	R	淡褐色	15	
12	羽AⅡb口	HS	17.2		2.6		B, C, E, G, H	良好	R	淡褐色	20	
13	羽BⅡa	NS	21.7		2.0		B, E, H	良好	R	灰白	15	
14	羽底部	HS				6.7	B, D, E, H	良好	R	外-淡褐色、内-淡黄褐色	50	

第74表 第42号住居跡出土土鍾観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
15	にぶい褐色	100	5.8	1.9	0.5	19.5	B 1	I a	50	
16	にぶい黄褐色	100	5.6	1.7	0.4	15.1	B 1	I a	51	
17	灰黄褐色	70		1.8	0.5	11.0	B 1	I a	52	

第105図 第43号住居跡



番号 4 3 住居跡

- 1 暗褐色土 炭土粒子を少量含む、白色粒子を多量に含む
- 2 黒褐色土 炭化粒子、白色粒子を少量含む
- 3 黒褐色土 炭土粒子、白色粒子を少量含む
- 4 暗褐色土 炭土粒子を少量含む
- 5 黒褐色土 炭土粒子を少量含む、炭化粒子を少量含む
- 6 暗灰褐色土 粘土、炭化物を含む 粘性あり
- 7 黒褐色土 炭土粒子を少量含む
- 8 黒褐色土 炭土粒子、炭化粒子を少量含む
- 9 赤褐色土 炭土を多量に含む (天井部)
- 10 褐色土 炭土粒子、白色粒子を少量含む

第43号住居跡 (第105図・第106図)

J-6・7グリッドで確認した。周辺は、区画溝・掘立柱建物跡などがあつた。遺構は、比較的疎らで、確認は容易であつた。

住居跡の形状は方形で、規模は長辺3.00m・短辺2.30m・深さ0.23mであつた。南西隅に小穴1基を検出した。

主軸方位は、N-97°-Eであつた。

カマドは、東壁南東隅寄りに検出した。左袖は、非常に短く地山を掘り残すが、袖を造らなと考えられる。焚き口部の左側から補強材の川原石が出土した。燃焼部は、掘り込みがみられず、煙道部へは、ほとんど段差なく移行する。煙道部は、やや南東方向に長く伸び、煙り出し部で立ち上がつていた。

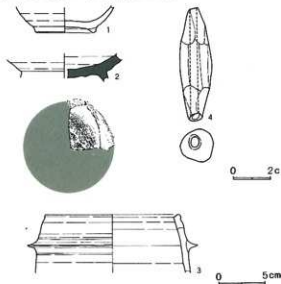
遺構の切り合い関係は、第2号掘立柱建物跡より新しかった。

1は、須恵器 (NS) の高台付甕である。2は、灰釉陶器の長頸壺である。3は、須恵器 (HS) の羽釜である。1は口縁部、2は口縁部・底部・高台、3は胴部上位以下が欠損している。

4は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第43号竪穴式住居跡を中壩Ⅱ期に位置付けたい。

第106図 第43号住居跡出土遺物



第75表 第43号住居跡出土土物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS				6.0	A, B, E, H	良好	R	黒	50	
2	長頸壺	K					D	良好		暗黄灰	10	破片
3	羽I B a	HS	14.1		3.2		B, E, H	良好		明褐	15	P1

第76表 第43号住居跡出土土鍾観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
4	にぶい橙	100	6.0	1.8	0.5	144	C1	I b	138	

第44号住居跡(第107図・第108図)

K-3・4、L-4グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであった。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺5.80m・短辺2.97m・深さ0.13mであった。長径方向に非常に細長い住居跡であった。

主軸方位は、N-10°-Eであった。

カマドは、東壁の南東隅寄りに検出した。袖は検出してない。燃焼部内の左右の壁の4ヶ所に、補強材として川原石が使用されていた。燃焼部は、不整形形の浅い掘り込みがみられ、煙道部に向かって緩やかに立ち上がっていた。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅で検出した。形状は、不整形形で、長径0.51m・短径0.48m・深さ0.15mであった。

遺構の切り合い関係は、第2号区画溝より古かった。

羽釜(8)は、カマド内と貯蔵穴内の破片が接合した。またカマド内から土師器の高脚高台付杯(2)・羽釜(9)が出土した。また貯蔵穴の脇からは、羽釜(7)が出土した。

1は、土師器の杯AVである。2は、土師器の杯Bに高脚高台の付いた杯である。3から6は、高台付椀である。5が須恵器(NS)の他は、須恵器(HS)である。3・5は底部と高台、6は口縁部と底部が欠損している。

7から10は、羽釜である。10が須恵器(NS)の他は、須恵器(HS)である。11は、須恵器(NS)の甔である。7・8は底部、9は胴部中位以下、10・11は胴部上位以下が欠損している。

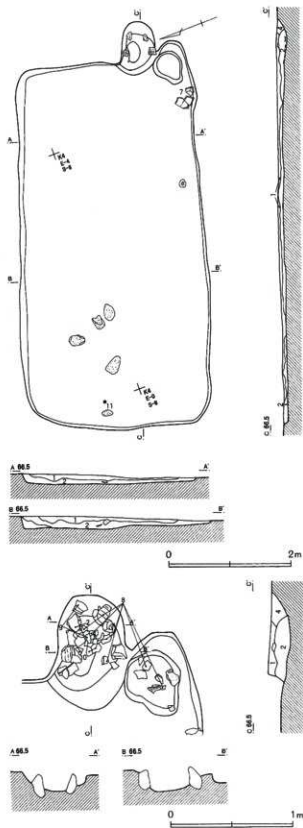
12は、釘と考えられる鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第44号竪穴式住居跡を中畑Ⅶ期に位置付けたい。

第77表 第44号住居跡出土土物観察表

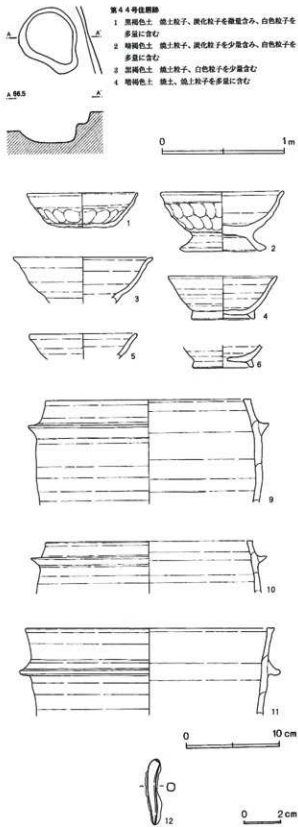
番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	杯AV	H	11.7	3.6		5.6	B, D, E	良好		淡橙	20	
2	高脚高台付杯	H	13.0	6.3		8.0	E, F, K	不良		黄橙	70	カマド
3	高台付椀	HS	14.8				B, E, I	普通	L	外-にぶい赤橙。内-褐灰	30	貯蔵穴
4	高台付椀	HS	11.5	4.6		6.5	B, E, I	普通	R	明褐	40	床面
5	高台付椀	NS	11.4				B, E, I	良好	R	灰黄	30	
6	高台付椀	HS				6.3	C, E, I	良好	R	灰白	40	
7	羽A I a i	HS	19.6		2.5		B, E, G, I	良好		暗褐	40	
8	羽A I a i	HS	20.5	25.1	2.3	3.2	A, B, D, G	良好		明赤褐	50	
9	羽I A a	HS	22.0		2.7		A, B, D, E, G, I	良好		明褐	20	カマド
10	羽A II b o	NS	22.0		1.7		A, B, C, D, I	良好		灰褐	15	
11	甔B II	NS	26.5		4.6		A, B, E, I	良好		灰褐	15	

第107図 第44号住居跡・出土遺物(1)

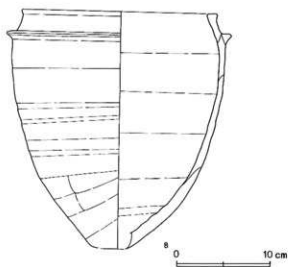
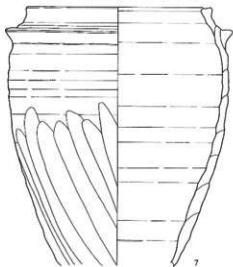


第44号住居跡

- 1 茶褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む、白色粒子を多量に含む
- 2 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む、白色粒子を多量に含む
- 3 茶褐色土 焼土粒子、白色粒子を少量含む
- 4 暗褐色土 焼土、焼土粒子を多量に含む



第108図 第44号住居跡出土遺物(2)



第45号住居跡(第109図・第110図)

K・L-5グリッドで確認した。周辺は、遺構が疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は長さ4.15m・短辺2.80m・深さ0.28mであった。

主軸方位は、N-10°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに3基検出した。1号カマドは、覆土の堆積状況から、住居跡の埋没以前に埋められていたと判断した。左袖は、検出できず、燃焼部の掘り込みもみられなかった。燃焼部から煙道部に向かっては、緩やかに傾斜していた。

第2号カマドは、両袖の先端部から補強材の川原石が出土し、造り付けの袖が住居跡内に伸びていたと推定した。焚き口部の前面には、径0.21m・深さ0.12mの掘り込みを検出した。燃焼部から煙道部へは、段をもって移行していた。燃焼部内から、天井部の補強材である大形の川原石が出土した。

第3号カマドは、左袖は第2号カマドと共有し、右袖は地山を掘り残して短く造られていた。焚き口部と燃焼部の境には、小さな段がみられた。燃焼部は、ほぼ水平で、段をもって煙道部に移行していた。第2・3号カマドは住居跡の埋没まで併用していたと考えられる。

遺構の切り合い関係は、第2号区画溝より古かった。

遺物は、1号カマド内から土師器の甕(14)、灰粘陶器高台付碗(12)、鉄製品(19・20)が出土した。

2号カマドからは、土師器の甕(15)と須恵器の高台付皿(3)が、3号カマドからは、土師器の甕(16)と須恵器の高台付碗(11)が出土した。

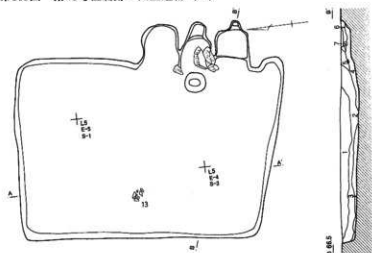
1は、須恵器(NS)の碗である。2から11は、高台付碗である。6・7は、須恵器(HS)であり、ほかは須恵器(NS)である。12・13は、灰粘陶器の高台付碗である。12の底部外面には、墨書「分」がみられる。1・8から11は口縁部と底部、3は高台、4・5・7は口縁部、6は口縁部と高台が次損している。5は、底部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

14から16は、土師器の甕である。17は、須恵器(S)の口縁部である。18は、灰粘陶器の長頸甕である。鉄製品(不明)14は底部、15は胴部下位以下、16は胴部中位以下が次損している。18は、頸部のみである。

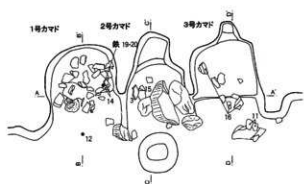
19から21は、鉄製品である。19はコの字状の不明鉄製品、20は板状鉄製品、21は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第45号竪穴式住居跡を中瀬Ⅵ期に位置付けたい。

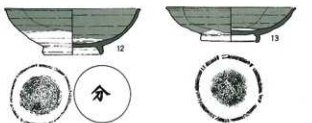
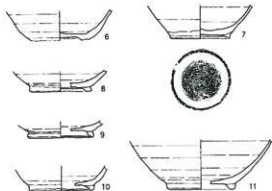
第109図 第45号住居跡・出土遺物(1)



0 2m



0 1m

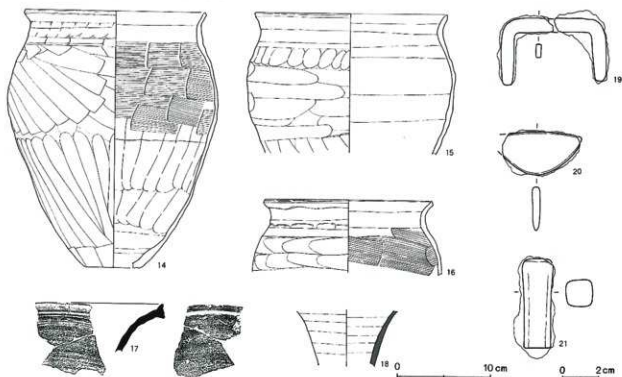


0 10 cm

第45号住居跡

- 1 暗褐色土 織土粒子、炭化物を少量含む、白色粒子を多量に含む
- 2 暗褐色土 織土粒子、炭化物、白色粒子を少量含む
- 3 黒褐色土 織土粒子、炭化物を少量含む
- 4 黒褐色土 織土粒子を多量に含む、炭化物を少量含む
- 5 暗褐色土 白色粒子を多量に含む
- 6 暗褐色土 織土を多量に含む
- 7 赤褐色土 織土ブロック上縁
- 8 暗灰褐色土 織土、白色粒子を少量含む
- 9 暗褐色土 織土を多量に含む、白色粒子を少量含む
- 10 赤褐色土 織土ブロックを多量に含む
- 11 暗灰褐色土 織土、白色粒子を少量含む
- 12 赤褐色土 織土ブロックを多量に含む

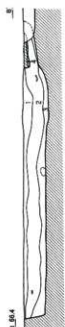
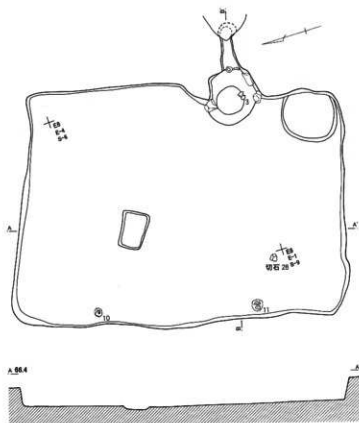
第110図 第45号住居跡出土遺物(2)



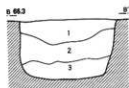
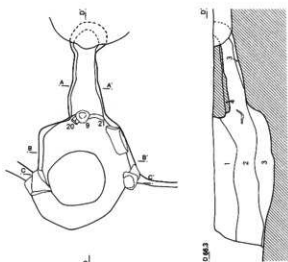
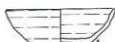
第78表 第45号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	輪軸	色調	残存	出土位置その他	
1	甗	NS				5.8	B, E	良	好	L	灰白	10	
2	高台付甗	NS	13.7	4.6		5.5	B, E, I	良	普通	L	灰白	60	
3	高台付甗	NS	13.2				B, E, I	普通	普通	L	灰白	60	カマド2
4	高台付甗	NS				5.7	B, E, I	普通	普通	L	灰白	30	
5	高台付甗	NS				4.9	B, E, I	普通	普通	R	灰白	30	
6	高台付甗	HS					B, E, I	普通	普通	L	にぶい黄橙	10	
7	高台付甗	HS				6.1	B, C	普通	普通	R	灰白	30	
8	高台付甗	NS				6.4	B, E, I	普通	普通	L	灰白	20	カマド2
9	高台付甗	NS				6.7	B, E, I	普通	普通	L	灰黄	10	カマド3
10	高台付甗	NS				6.1	B, I	良	好	L	灰白	5	
11	高台付大甗	NS				6.5	E, I	普通	普通	R	浅黄	40	カマド3
12	高台付甗	K	14.3	4.9		6.1	B	良	好	淡灰	緑	80	北カマド前床直
13	高台付甗	K	13.7	3.6		5.8		良	好	淡灰	灰	80	
14	甗 B III a	H	19.2			6.0	B, E	良	好	暗橙	橙	20	カマド1
15	甗 A III c	H	20.4				B, E, F	普通	普通	淡	橙	30	カマド2
16	甗 B III a	H	17.7				B, E, G	普通	普通	暗	茶	10	カマド3
17	甗	S					B, I	良	好	灰	灰	5	
18	長頸甗	K					D	良	好	灰	褐		頸部のみ

第111図 第46号住居跡・出土遺物(1)



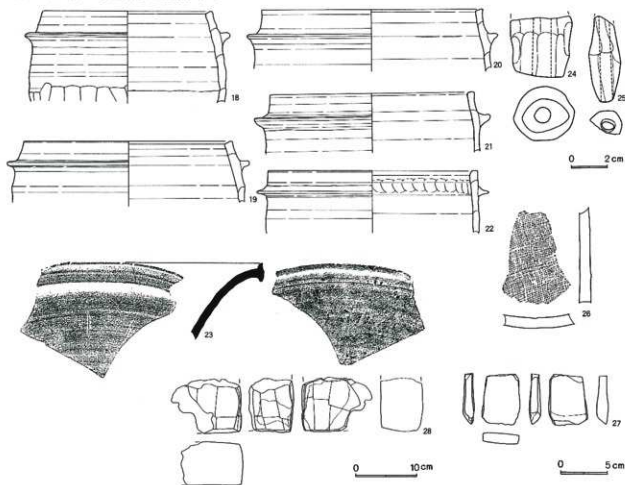
- 第46号住居跡
 1 黄褐色土 焼土、目録石を少量含む
 2 黄褐色土 目録石を多量に含む
 3 黄褐色土 焼土を微量含む 硝子あり(炭化物層)
 4 赤褐色土 焼土が壁跡により赤色化



0 50cm

0 10cm

第112図 第46号住居跡出土遺物(2)



第46号住居跡(第111図・第112図)

E-7・8、F-8グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・土塼・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取った。

住居の形状は長方形であった。規模は、長辺5.03m・短辺3.85m・深さ0.35mであった。住居跡の中央やや北寄りから長径0.6m・短径0.45m・深さ0.14mの土塼を検出した。

主軸方位は、N-102°-Eであった。

カマドは、東壁南寄りに検出した。左袖は、やや幅広く地山を掘り残して造られ、右袖は、住居跡の壁をそのまま利用していた。「片袖型」であった。左袖の先端と焼き口部の右側には、補強材としての川原石が使用されていた。焼き口部から燃焼部にかけては、円形の浅い掘り込みがみられた。燃焼部から段をもって、

煙道部へと移行していた。煙道部は細長く地山を掘り抜いていた。煙り出し部は、小穴により切られていた。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅で検出した。形状は、円形で径0.87mで、深さは0.03mと非常に浅かった。

遺構の切り合い関係は、第201号土塼よりも古く、第4号掘立柱建物跡よりも新しかった。

遺物は、カマド内から羽釜(20・21)、須恵器の高台付碗(9)、須恵器の坏(3)が出土した。また、西壁の際から須恵器の高台付碗(10・11)が出土した。

1は、土師器の坏Aである。2から8は、碗である。6は須恵器(NS)、8は黒色土器であり、他は、須恵器(HS)である。9から12は、高台付碗である。11・12は須恵器(NS)、他は、須恵器(HS)である。1・6・7は底部、8は口縁部が欠損している。9・10は、口縁部に黒色の付着物が確認できる。9は、

油煙の痕跡と考えられる。

13は、灰釉陶器の高台付皿である。14・15は、灰釉陶器の高台付碗である。16は、緑釉陶器の碗である。17は、中国産（定州窯）の白磁の碗である。13から15は底部のみ、16・17は口縁部破片である。

18から22は、羽釜である。20は須恵器（HS）、他は、須恵器（NS）である。23は、須恵器（S）の大甕の口縁部である。18は胴部中位以下、19から22は胴部上位以下が欠損している。

24・25は、土錘である。

26は、平瓦である。

27は、砥石である。28は、凝灰岩の切石である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第46号竪穴式住居跡を中塚Ⅶ期に位置付けたい。

第81表 第46号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
26	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	-

第47号住居跡（第113図・第114図）

E-8グリッドで確認した。カマドのみを当初確認し、住居跡の存在を推定していたが、第4号掘立柱建物跡の遺物が遺構確認面を覆っていたため、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.78m・短辺3.00m・深さ0.50mであった。カマド前面には、長径0.65m・深さ0.15mの浅い掘り込みを検出した。また南東隅から南壁にかけて、最大幅0.5mの平坦面を検出した。

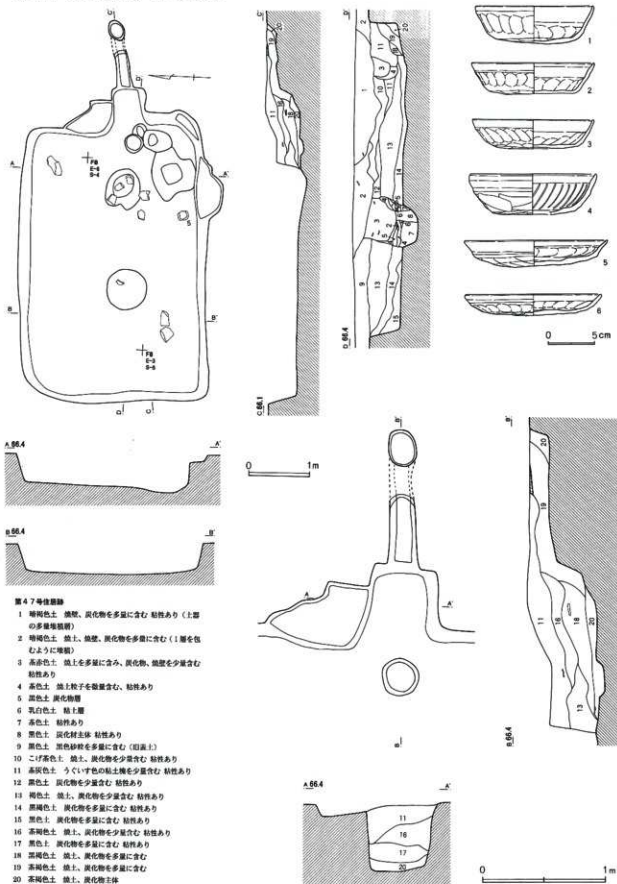
第79表 第46号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈿	底径	胎土	焼成	輪軸	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A	H	13.0			D, E	普通	R	淡黄橙	30	貯蔵穴
2	碗	HS	10.2	2.8	4.3	B, E		良好	R	橙	30	
3	碗	HS	10.5	3.3	4.7	B, E		良好	L	橙	100	
4	碗	HS	11.7	3.7	6.2	B, E, G		普通	L	灰	30	
5	碗	HS	10.8	4.4	5.0	B, E, I		普通	R	にぶい黄橙	80	
6	碗	NS	10.9	4.0	5.2	B, H		良好	R	灰白	25	
7	碗	HS	12.5	4.1	7.0	B, E, I		良好	R	褐灰	20	
8	碗	黒色			6.2	E, H		良好	R	外-白。内-黒	30	
9	高台付碗	HS	11.0	4.8	4.9	B, E, I		良好	R	にぶい橙	80	
10	高台付碗	HS	11.0	4.9	5.1	B, E, H		良好	L	黒	100	穿孔
11	高台付碗	NS	11.0	4.5	5.9	B, E, I		良好	R	灰	80	
12	高台付碗	NS	11.0	4.6	5.5	B, D, E		良好	R	灰白	60	
13	高台付皿	K			6.7	F		良好		淡灰	20	貯蔵穴
14	高台付碗	K			7.9	B, D		良好		淡灰	10	
15	高台付碗	K			7.2	B, D		良好		暗灰	10	転用碗
16	緑釉碗	M				B		良好		淡緑	5	
17	白磁碗	白磁						良好		白	5	
18	羽BⅡa	NS	17.9	2.6		B, E, H		良好	R	灰褐	20	
19	羽AⅡa	NS	22.1	2.3		B, E		良好	R	灰褐	15	
20	羽AⅠa	HS	23.4	2.7		B, C, E		良好	R	明褐	25	カマド
21	羽BⅡa	NS	21.6	2.6		B, D, E		良好	R	灰	20	カマド
22	羽BⅡb	NS	22.2	2.3		B, E, H, I		良好	R	灰白	15	
23	大甕					B						

第80表 第46号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
24	橙	40	3.3	3.2	0.8	33.7	A 1	Ⅱ a	6	
25	浅黄橙	40			0.6	6.7	C 1	V b	139	

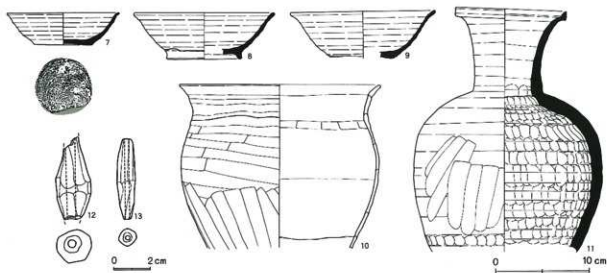
第113図 第47号住居跡・出土遺物(1)



第47号住居跡

- 1 暗褐色土 焼酎、炭化物を多量に含む 粘粒あり (上部の多量層参照)
- 2 暗褐色土 焼土、焼酎、炭化物を多量に含む (1層を包むように堆積)
- 3 高赤色土 焼土を多量に含む、炭化物、焼酎を少量含む 粘粒あり
- 4 高赤色土 焼土粒子を豊富に含む、粘粒あり
- 5 黒色土 炭化物層
- 6 乳白色土 粘土層
- 7 高赤色土 粘粒あり
- 8 黒色土 炭化封土跡 粘粒あり
- 9 黒色土 炭化物を多量に含む (黒土)
- 10 高赤色土 焼土、炭化物を少量含む 粘粒あり
- 11 高赤色土 今ぐ(1)寸の粘土層を少量含む 粘粒あり
- 12 黒色土 炭化物を少量含む 粘粒あり
- 13 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む 粘粒あり
- 14 暗褐色土 炭化物を多量に含む 粘粒あり
- 15 黒色土 炭化物を多量に含む 粘粒あり
- 16 高赤色土 焼土、炭化物を少量含む 粘粒あり
- 17 黒色土 炭化物を多量に含む 粘粒あり
- 18 暗褐色土 焼土、炭化物を多量に含む
- 19 高赤色土 焼土、炭化物を多量に含む
- 20 暗褐色土 焼土、炭化物主体

第114図 第47号住居跡出土遺物(2)



主軸方位は、 $N-82^{\circ}-E$ であった。

カマドは、東壁のはほぼ中央で検出した。袖・補強材ともに検出できなかった。カマドの左壁は、段をもち、幅約0.8mにわたって平坦面が造られていた。焚き口部の前面には、径0.29m・深さ0.12mの円形の浅い掘り込みを検出した。燃焼部の形状は長方形で、底面の掘り込みはみられなかった。煙道部へ向かって緩やかな傾斜がみられ、細長い煙道部へは、段をもって移行していた。煙道部は、1.5mのところ急に立ち上がり煙り出し部となっていたため、地山を掘り抜いたと考えられる。

不整形の掘り込みを、カマドの右側、南東隅付近で検出した。貯蔵穴であろう。長径0.75mで、深さ0.15mと浅かった。

遺構の切り合い関係は、第4号掘立柱建物跡、第198号土壇より古かった。

1から6は、土師器である。1は、坏ANである。2・3は、坏Aである。4は、暗文土器である。5・6は、皿である。4は、底部が欠損している。

7は、須恵器(S)の碗である。8・9は、須恵器(S)の高台付碗である。8は底部、9は底部と高台が欠損している。

10は、土師器の甕である。11は、須恵器(S)の長頸壺である。12・13は、土錘である。10・11は、胴部

下位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第47号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第48号住居跡(第115図・第116図・第117図・第118図)

F・G-8・9グリッドで確認した。周辺は、小穴などの遺構がやや密集していた。覆土上面の火山灰をもとに、比較的容易に確認できた。

住居跡の形状は方形であった。規模は、長辺5.30m・短辺4.48m・深さ0.46mであった。

主軸方位は、 $N-101^{\circ}-E$ であった。

北壁に幅0.4m、南壁の一部に幅0.55mの階段状の平坦面を検出した。また床面に4基の土壇を検出した。

1号土壇は、長径2.09m・短径1.3m・深さ0.15mで形状は、不整形円形であった。2号土壇は、楕円形で長径1.47m・短径1.13m・深さ0.14mであった。3号土壇は、長径2.03m・短径1.55m・深さ0.15mの不整形な形状で、上面に炭化物層を検出した。4号土壇は、円形で径1.0m・深さ0.36mであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。左袖は、地山を掘り残したままで、短く住居跡内に伸びていた。右袖は、住居跡の壁をそのまま利用していた。「片袖型」のため、カマドを境に壁の形状が大きく崩れてい

第82表 第47号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A IV	H	12.4	4.1	8.2	B, D, E	普通		淡黄白	70	
2	坏	A	H	12.8	3.3	7.3	B, D, E	不良		暗黄橙	80	
3	坏	A	H	12.8	3.1	7.0	B, D, E	良好		淡黄橙	60	
4	坏(暗文)	H	13.2	4.3		8.5	B, D, E, H	普通		暗黄橙	50	カマド
5	罎	H	15.0	2.9		12.8	B, D, E	普通		暗黄橙	90	
6	罎	H	14.2	2.3		9.0	B, D, E, H	良好		淡黄橙	60	
7	碗	S	11.7	3.4		6.1	B	良好		灰	50	
8	高台付碗	S	14.5	4.9		7.6	B, G	良好		黄	25	
9	高台付碗	S	15.1				B	良好		灰	30	
10	甗 B III c	H	21.0				B, E	良好		橙	40	カマド
11	長頸壺	S	11.6				B, G	良好		青	70	カマド

第83表 第47号住居跡出土土器観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
12	にぶい黄橙	75		1.9	0.4	11.9	C 1	II b	140	
13	にぶい橙	100	4.3	1.0	0.2	3.5	C 2	I a	392	

た。左袖の先端、それに対応する焚き口部の右側は、補強材として川原石を使用していた。焚き口部の前面には、径0.47m・深さ0.38mの円形の掘り込みがあった。焼土ブロックや焼土が多量にみられた。燃焼部は、奥に向かってやや低くなり、段をもって幅の広い煙道部へ移行していた。カマドの周辺からは、構築材の川原石がまとまって出土した。

貯蔵穴は、カマドの右側の南東隅で検出した。形状は、隅丸方形で径0.79m・深さ0.21mであった。

遺構の切り合い関係は、古墳時代前期の第1号溝より新しく、第29号土壌より古かった。

遺物は、カマド内から土器器の坏(3・5)・須恵器の坏(21)・須恵器の高台付碗(33・39)・須恵器の高脚高台付碗(48)が出土し、貯蔵穴から須恵器の坏(23・26)・須恵器の高台付碗(41)・羽釜(69)が出土した。そのほか住居跡の北東部から須恵器の坏(15・22)・須恵器の高台付碗(31・36)・灰釉陶器の碗(58)・羽釜(68)が出土し、南壁の西寄りの壁際から、須恵器の坏(17)・須恵器の高台付碗(32・45)・凝灰岩の切片(90)が出土した。

1から14は、土器である。1から11は、坏Bである。12から14は、高台付坏Bである。12は高台、13・

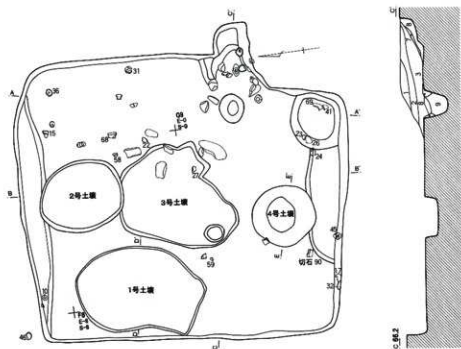
14は底部と高台が欠損している。10は、口縁部に黒色の付着物が確認できる。煤の痕跡と考えられる。

15から31は、碗である。15・18・23・24・28・30・31は、須恵器(NS)である。ほかは、須恵器(HS)である。32から46までは、高台付碗である。34・36・37・42・43・44・46は、須恵器(NS)である。ほかは、須恵器(HS)である。47から49は、高脚高台付碗である。47は、須恵器(NS)である。ほかは、須恵器(HS)である。25・29・40・42・44は底部、33は高台、48・49は口縁部が欠損している。25は口縁部に、29・31は内面口縁部に、45は内面体部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

50は、黒色土器の高台付碗である。51から55は、灰釉陶器の高台付碗である。56から60は、緑釉陶器の高台付碗である。50・51は底部、52・53・55・57・58は口縁部と底部、54は口縁部、56は底部と高台が欠損している。59・60は、体部破片である。

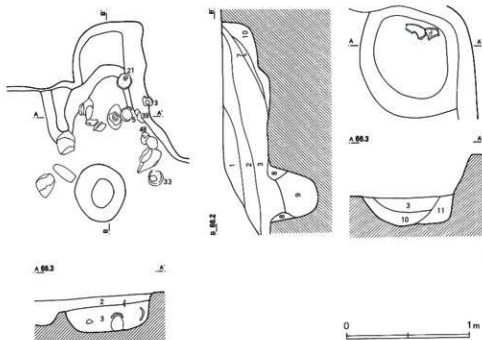
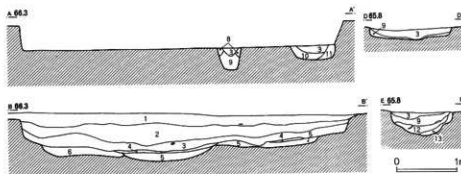
61は、土器器の小形の甕である。62から66は、土器器の甕である。67から69は、須恵器(HS)の羽釜である。70は、須恵器(HS)の甕である。71・72須恵器(HS)の甕である。73は、須恵器(NS)の甕である。74は、広口長頸壺である。62は胴部以下、

第115図 第48号住居跡

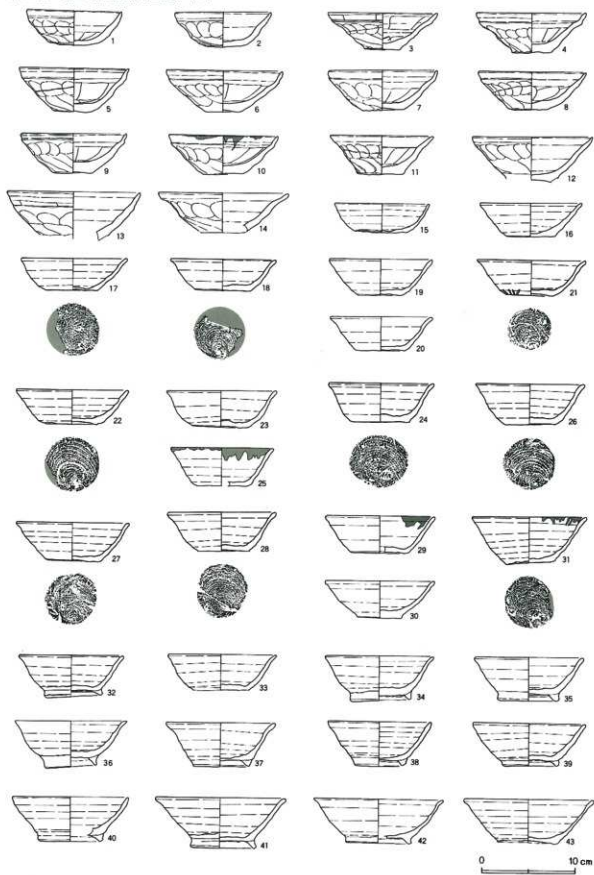


第48号住居跡

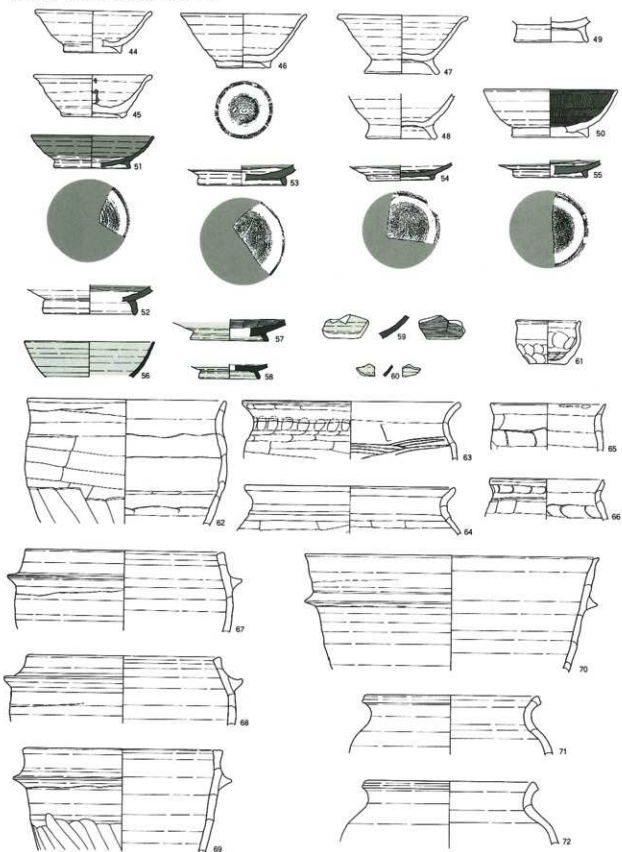
- 1 赤褐色土、目砂石を多量に含む
- 2 赤色土、焼土粒子を多量に含む、炭化物を少量含む、土器片多量
- 3 こげ黒色土、炭化物を多量に含む、粘りあり
- 4 黒色土、炭化物層
- 5 暗褐色土、焼土を多量に含む（炭化物層）
- 6 赤褐色土、焼土、炭化物を多量に含む
- 7 赤褐色土、焼土ブロック主体（天井板崩落）
- 8 暗褐色土、焼土、炭化物を多量に含む
- 9 暗赤褐色土、焼土粒子、焼土ブロックを多量に含む、粘りあり
- 10 黒色土、炭化物を少量含む
- 11 褐色土、白色粒子を少量含む
- 12 赤褐色土、白色粒子を少量含む、粘土層
- 13 赤褐色土、焼土、炭化物を多量に含む



第116图 第48号住居跡出土遺物(1)

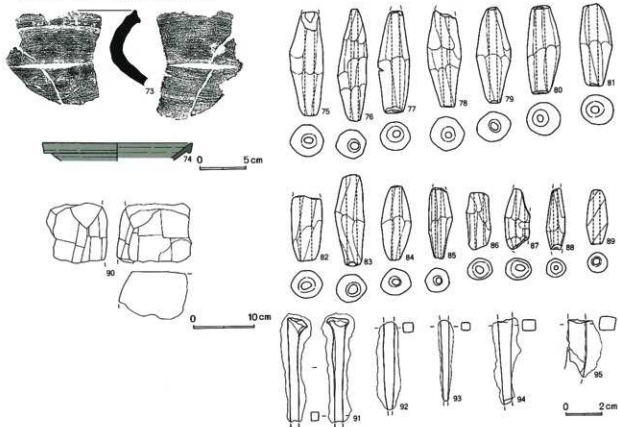


第117区 第48号住居跡出土遺物(2)



0 10 cm

第118図 第48号住居跡出土遺物(3)



第84表 第48号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	質感	色調	残存	出土位置その他
1	坏	B	H	100	3.7	5.0	B, E, H	普通	通	淡 橙	80	カマド
2	坏	B	H	100	3.7	3.8	B, E, H	普通	通	黄 橙	50	
3	坏	B	H	11.4	3.9	3.8	B, E, H	不	良	暗 橙	50	カマド 砂
4	坏	B	H	11.6	4.3	4.2	B, E, H	普通	通	淡 黄 橙	50	砂
5	坏	B	H	11.5	4.6	3.9	B, D, E, H	普通	通	橙	90	カマド 砂
6	坏	B	H	12.2	4.4	3.7	B, D, E	普通	通	淡 黄 橙	30	
7	坏	B	H	11.5	4.2	4.2	A, B, E	普通	通	暗 黄 褐	50	SK 2
8	坏	B	H	11.3	4.0	4.1	B, D, E	普通	通	にぶい 褐	70	上層黒色土層
9	坏	B	H	11.1	4.2	4.0	B, D, E	普通	通	淡 黄 土	40	SK 3
10	坏	B	H	11.5	4.1	4.3	B, E, I	普通	通	淡 黄 橙	100	
11	坏	B	H	10.8	4.1	5.0	B, D, E	良	好	橙	40	上層黒色土層砂
12	高台付坏	B	H	12.7			B, E	普通	通	淡 橙	30	砂
13	高台付坏	B	H	1.39			B, D, E	不	良	淡 黄 褐	20	SK 1
14	坏	B	H	13.7			B, D, E, H	不	良	橙	30	SK 3
15	碗	NS	9.9	3.1		5.6	E, G	普通	通	灰白(内外一部-灰)	80	
16	碗	HS	10.7	3.6		5.1	E	普通	通	にぶい 橙	60	SK
17	碗	HS	11.1	3.4		5.4	B, I	良	好	黄 灰	75	
18	碗	NS	10.9	3.3		5.5	B, E, I	普通	通	灰 黄	40	
19	碗	HS	10.9	3.8		4.5	B, E, I	普通	通	にぶい黄橙	30	
20	碗	HS	10.7	3.6		5.0	E, I	普通	通	にぶい 橙	50	
21	碗	HS	11.3	3.7		4.2	B, E, I	普通	通	橙	100	カマド
22	碗	HS	11.8	3.6		5.4	B, E	良	好	にぶい黄橙	60	
23	碗	NS	11.6	3.9		5.8	B, E	普通	通	黄 灰	80	

第85表 第48号住居跡出土土物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他	
24	碗	NS	11.0	4.1		6.2	B, E	良好	灰	黄	70		
25	碗	HS	10.7	4.1		5.1	B, E, I	良好	にぶい	黄橙	20		
26	碗	HS	11.4	4.3		5.1	B, E, I	良好	にぶい	黄橙	100		
27	碗	HS	11.8	4.1		5.3	B, E, I	良好	にぶい	黄橙	50		
28	碗	NS	11.4	4.1		5.4	B, E	良好	灰	白	70	貯穴	
29	碗	HS	11.5	3.9		5.2	B, E	良好	黄	灰	30		
30	碗	NS	11.5	4.0		4.7	B, E	良好	灰	白	50		
31	碗	NS	12.0	5.0		5.0	B, E	普通	灰	黄	90		
32	高台付碗	HS	10.9	4.5		5.6	B, E, I	普通	褐	灰	100		
33	高台付碗	HS	11.3				B, E, I	良好	にぶい	橙	95	カマド	
34	高台付碗	NS	11.4	4.9		6.0	B, E	普通	灰	黄	80		
35	高台付碗	HS	11.3	4.6		6.0	B, C, E, H, K	良好	淡	橙	40	カマド	
36	高台付碗	NS	11.6	5.0		5.3	B, E, H	良好	灰	白	80		
37	高台付碗	NS	11.5	4.7		5.9	B, E	良好	黄	灰	80	上層黒土	
38	高台付碗	HS	10.8	4.7		4.8	B, E	普通	にぶい	橙	80	上層黒土	
39	高台付碗	HS	11.8	4.5		5.4	B, E, I	普通	にぶい	橙	70	カマド	
40	高台付碗	NS	12.3	4.7		6.3	B, E	良好	黄	灰	30	上層黒土	
41	高台付碗	HS	13.7	5.3		6.5	B	普通	灰	白	60		
42	高台付碗	NS	13.6	4.7		6.8	B, I	普通	灰	白	30		
43	高台付碗	NS	13.5				B, E	普通	灰	白	25	上層	
44	高台付碗	NS	12.3	4.4		5.9	B, E	良好	灰	灰	20	カマド	
45	高台付碗	HS	12.4	4.5		6.2	E	普通	灰	黄	80		
46	高台付碗	NS	13.3	5.7		5.2	B, E, I	良好	灰	灰	50		
47	高脚高台付	NS	13.5	6.2		7.5	B, E, H	良好		黒	70		
48	高脚高台付	HS				6.9	B, I	普通	にぶい	橙	30	カマド	
49	高脚高台付	HS				7.5	B, D, E, H	良好	浅	黄	橙	60	
50	高台付碗	黒色	14.1	5.0		7.8	B, G	良好	にぶい	橙	40		
51	高台付碗	K	12.8	3.4		7.8	B	良好	淡	灰	20	カマド	
52	高台付碗	K				9.7	D	良好	灰	灰	10		
53	高台付碗	K				9.2	B, D	良好	灰	灰	20		
54	高台付碗	K				6.7	B	良好	くすんだ		20		
55	高台付碗	K				7.3	B, D	良好	暗	灰	20	上層黒土	
56	高台付碗	M	12.6				B						
57	高台付碗	M				7.9	B						
58	高台付碗	M				6.3	B						
59	高台付碗	M					B						
60	高台付碗	M					B						
61	小形	甗	6.8	4.6		4.0	B, E	不良	暗	栗	30	上層黒土上層	
62	甗	AⅣc	21.0				B, E	良好	橙		15	SK1	
63	甗	AⅣb	22.8				B, E, H	良好	橙		10	上層黒土	
64	甗	AⅢc	22.0				B, C, E	良好	浅	黄	橙	15	上層黒土
65	台付甗		12.1				B, E, H	良好	にぶい	橙	15	上層黒土	
66	台付甗		11.9				B, E	良好	橙		15		
67	羽AⅡa	口	HS	21.0	29		B, C, E	良好	淡	橙	20	SK1	
68	羽AⅡb	口	HS	20.2	23		B, E, G	良好	浅	黄	橙	20	
69	瓶	BⅡ	HS	20.4	32		B, E, H, K	良好	橙		20		
70	瓶	BⅡ	HS	31.1	49		B, E, G, H	良好	淡	赤	褐	15	貯蔵穴
71	口ク口甗	HS	18.1				B, C, E	良好	浅	黄	橙	15	
72	口ク口甗	HS	17.5				B, D, H	良好	淡		15	上層黒土	
73	甗	NS					B	良好	灰		5	上層黒土	
74	広口長頸甗	K	15.8				B	良好	灰	白	10		

第86表 第48号住居跡出土土器観察表

番号	色	調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他		
75	浅	黄	橙	80		1.9	0.5	133	C 1	I b	141		
76	に	ぶ	黄	橙	70	6.0	1.7	0.5	116	C 1	I b	142	
77	浅	黄	橙	90			1.6	0.4	137	C 1	I a	143	
78	褐		灰	90			1.8	0.4	140	C 1	II a	144	
79	浅	黄	橙	100	5.1	1.8	0.4	117	C 1	I a	145		
80	浅	黄	橙	100	4.5	1.8	0.4	136	C 1	I a	146		
81	に	ぶ	黄	橙	100	4.5	1.8	0.5	107	C 1	I a	147	
82	浅	黄	橙	60			1.7	0.6	83	C 1	IV a	148	
83	浅	黄	橙	100	4.8	1.7	0.6	93	C 1	I c	149		
84			橙	100	3.9	1.6	0.4	77	C 1	I a	150		
85	褐		灰	70			1.4	0.3	55	C 2	II a	393	
86	に	ぶ	灰	黄	90	3.0	3.0	0.4	41	C 2	II b	394	
87	浅	黄	橙	30			1.3	0.5	37	C 2	III	395	
88	に	ぶ	い	橙	80		1.1	0.2	25	C 2	II b	396	
89	褐		灰	100	2.9	1.1	0.4	28	C 2	I a	397		

63から68・71・72は胴部上位以下、69・70は胴部中位以下が欠損している。73・74は、口縁部のみである。

75から89は、土鍾である。

90は、凝灰岩である。

91から95は、鉄製品である。91・92・93は釘、94・95は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第48号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

49号住居跡（第119回）

F・G-9グリッドで確認した。周辺は、土壌や小穴など遺構が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.36m・短辺3.63m・深さ0.14mであった。

主軸方位は、N-84°-Eであった。

カマドは、南壁で検出した。南壁にカマドを構築したのは、本住居跡と第225号住居跡の二軒のみであった。両軸は、検出されず、わずかに浅く楕円形に掘り込んだ燃焼部を検出した。燃焼部の位置から軸は、造り付けで、住居跡内に伸び、燃焼部全体が住居跡内に造られていたと推定した。

遺構の切り合い関係は、第236・237より古かった。

遺物は、カマド内から土師器の甕（11・12）、カマド脇から須恵器の高台付皿（5）、南西隅から土師器

の坏（1・2）が出土した。

1から4は、土師器である。1・2は、坏AⅠである。3は、坏AⅡである。4は、皿である。2・3は、底部が欠損している。

5は、須恵器（HS）の高台付皿である。6は、黒色土器の碗である。

7から9は、灰釉陶器陶器である。7は高台付碗、8・9は、段皿である。10は、緑釉陶器の高台付碗である。7から10は、口縁部と底部が欠損している。

11・12は、土師器の甕である。13は、須恵器（S）の甕である。11・13は胴部上位以下、12は胴部中位以上が欠損している。

14は、土鍾である。15は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第49号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第50号住居跡（第120回）

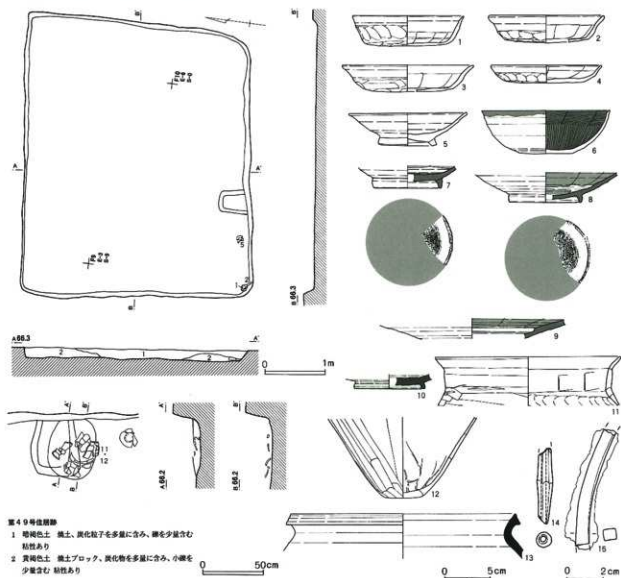
G-9グリッドで確認した。周辺は、土壌や小穴があったが、比較的疎疎であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.94m・短辺2.74m・深さ0.08mであった。

主軸方位は、N-83°-Eであった。

カマドは、第51号住居跡が破壊した可能性もあったが、元来、カマドを付設しなかった住居跡と推定した。

第119図 第49号住居跡・出土遺物



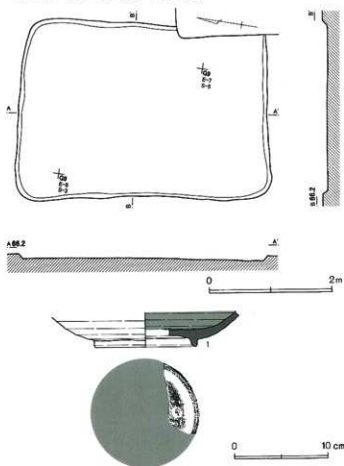
第49号住居跡

- 1 暗褐色土 炭化粒子を多量に含み、礫を少量含む
粘性あり
- 2 黄褐色土 炭土ブロック、炭化物を多量に含み、小礫を
少量含む 粘性あり

第87表 第49号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	踵	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他		
1	環	A IV	H	11.8	3.2	8.6	B, D, E	普通	通	淡	橙	100		
2	環	A IV	H	12.2	2.9	8.9	B, D, E	良好	好	淡	橙	30		
3	環	A II	H	14.0	2.9	9.5	B, D, E	不良	通	淡	橙	80		
4	皿		H	11.7	1.9	8.2	B, E	普通	通	淡	橙	20		
5	高台付皿	皿	H S	12.5	3.5	5.9	B, E, H	良好	好	外-赤褐 内-黒褐	橙	60		
6	碗		黒色	13.6	4.5	5.8	B, C	良好	好	浅	黄	橙	25	
7	高台付碗	碗	K			7.0	B, D	良好	好	暗	灰	20		
8	段	皿	K			7.4	B	良好	好	灰	灰	20		
9	段	皿	K				B	良好	好	灰	灰	15		
10	高台付碗	M	H			7.2	B, H	良好	好	淡	緑	10		
11	甕	B II	I	19.8			B, C, E	良好	好	浅	黄	橙	40	
12	甕	底部	H			3.9	B, C, E, H	良好	好	浅	橙	橙	80	
13	甕	甕	S	24.0			B, G	良好	好	暗	青	灰	15	

第120図 第50号住居跡・出土遺物



遺構の切り合い関係は、第51号住居跡より古かった。

1は、灰釉陶器の高台付碗である。1は、口縁部と底部が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第50号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第51号住居跡 (第121図)

G-9・10グリッドで確認した。周辺は、土壌や小穴がみられるが、比較的疎であった。

第88表 第49号住居跡出土土器観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
14	褐	灰	80		0.9	0.3	2.2	C 2	I a	396

第89表 第50号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	類別	口径	器高	径	底径	胎土	焼成	釉種	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	K				10.7	D	良	好	黄灰白	30	

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.48m・短辺2.63m・深さ0.19mであった。

主軸方位は、N-81°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。左右の袖は、住居跡内に張り出すように地山を掘り残して造られていた。両袖の先端には、補強材の川原石が使用されていた。幅の狭い燃焼部は、楕円形に浅く掘り込まれ、小穴が、燃焼部奥から煙道部を破壊して不明であった。燃焼部の中央から川原石を使用した支脚を検出した。この支脚の上からは、須恵器の高台付碗(4)が、伏せられた状態で出土した。

カマド右脇の南東隅に径0.3mの小穴状の掘り込みを検出した。貯蔵穴としては、規模が小さい。

遺構の切り合い関係は、第50号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内からは、須恵器の坏(1)・須恵器の高台付碗(5)、カマド前面からは、灰釉陶器の高台付皿(8)が出土した。

1・2は、須恵器(HS)の碗である。3から7は、須恵器(HS)の高台付碗である。1・2は、底部が欠損している。5は、内面体部から底部にかけて黒色の付着物で確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

8は、灰釉陶器の高台付皿である。9は、緑釉陶器の高台付碗である。9は、体部破片である。

10は、須恵器(NS)の羽釜である。11は、須恵器(HS)の高脚高台付人形鉢である。10は、胴部下位